第３編

同窓生からのメッセージ

キィウィ

1、3年課程(本科、看護科)同窓生からのメッセージ

東京医科大学附属高等看護学校3年課程 第1～12回生

1964(昭和40)年4月～1978(昭和53)年3月

東京医科大学看護専門学校3年課程 第13～47回生

1978(昭和53)年4月～2013(平成25)年3月

卒業生 3167名

東京医科大学看護専門学校3年課程　第48～50回生

2013(平成25)年4月～2016(平成28)年3月閉校予定

在校生 223名

※第3編同窓生からのメッセージの掲載順は、開設年度順(3年課程→2年制進学課程別科→3年制進学課程進学科)とする。

※昭和39年に開設された3年課程は、6回生が入学した昭和44年度まで、本科・看護科と言う呼称の届け出はなされていなかった。昭和45年に2年課程(進学課程)『別科』が併設された当時『本科』と呼ばれ、その後『別科』閉校後に併設された2年課程(3年制夜間進学課程)Ⅱ部が昭和53年に『進学科』と改称された時、『本科』は『看護科』に改称されて現在に至っている。

1回生からのメッセージ

第1回生(昭和39年入学) 小関(大西) 顕代

50周年おめでとう御座います。私の年齢はもう70歳に近くなり歴史を感じます。お陰様で44年間看護師を勤め上げ、最近は、近くの介護施設でボランティアがてらに、お年寄りのお世話をしています。

今振り返りますと、私の看護師生活を支えてきたものは、看護学校で学んだ揺ぎ無い看護観のお陰です。看護人生で、その時々の嬉しかった時、悩んだ時、理不尽な出来事に出会ったとき、看護観が変わったのですが、学生時代に聖路加国際病院での実習は今も私の中に鮮明に残っており私の看護の原点です。その内容をご紹介します。

先ず最初に、看護計画の作成！！　当時では、新しい取り組みで、勿論東医大では、導入されていませんでした。計画発表時、私の受持ちの患者様は、腎不全の方で、塩分制限が厳しく、食欲が湧かず摂取量が少なく、困ってました。チーズがお好きで、制限の範囲内で、栄養士と相談し、なんとか食べていただく計画でした。発表時、スーパーバイザー（看護師長）から、個別性のある計画と誉められました（その他の計画も良く出来ているとも)。学生は、誉めて育てる事も学びました。次に、ユーティリティルーム（汚物室）がとても美しく整理整頓されており、特にベッパンカバー（便器カバー）が男性用（青色)、女性用（ピンク色）が何枚も準備されており、病室に便器、尿器を持って行くときは、必ずそのカバーが使用され、なんと、エレガントに仕事をしているのだろうと印象的でした。私事ですが、国公立病院で30年以上勤務し、転勤する施設毎に、便器カバーを作成していただきました。仕事は、スマートに品格をもってせねばと教わりました。排泄介助では、私が便器を挿入すると、排泄出来ない受け持ち患者様から拒否され悲しかったのですが、何回も挑戦させて頂き、気持ちが通じ合い、排泄が成功した時の喜び、いつも学生にこの失敗談を話し勇気づけてきました。朝のミーティング（申し送り）では、5～10分間（立って輪になり）要点を要領よく話されている姿勢を学んだ事、その他聖路加病院の環境など、素晴らしいものでした。当時の与謝野光学校長の計らいで1回生だけの経験だったとお聴きし、教務の先生方のご尽力により実習出来た事を有り難く思い出されます。

第1回生卒業式 同窓会館にて(昭和42年)

一言メッセージ

第 2 回生(昭和 40 年入学) 角田(吉川) 秀子

約 3600 名の同窓生の皆様、お元気で活躍されていることと思います。開校 50 周年心よりお悦び申し上げます。

学生当時、看護学生が実習時に着用しているユニホームのデザインについて学校の先生方から意見を求められ、2 回生の河津(水野)芳子さんが高校生時代にテレビドラマで見た『看護婦物語』の看護学生の服を描き、先生方に提案しました。同窓会便りで戴帽式の写真を見るたびに懐かしく思います。

クラスメートの 4 名が一足先に他界されましたが、私達の心の中にはいつも一緒です。平成 22 年 9 月 23～25 日、田名部(古舘)悠子さんの別荘と八戸の自宅に宿泊。総勢 8 名。既に 60 代の私たちは、完全にタイムスリップし、懐かしい寮生活の学生時代のように夜更けまでおしゃべりをして楽しい時間でした。ちなみに集合写真は八戸海猫ラインの大須賀海岸です。

左から坂下(竹下) 石井(鈴木) 長谷川(泉谷) 関根(最上)
田名部(古館) 金沢(園田) 角田(吉川) 森田(新城)

1～3 回生集合写真-1 回生の卒業式の時- 同窓会館にて(昭和 42 年)

宝物の学生時代

医療法人恵愛会 柳井病院 看護部長
第3回生(昭和 41 年入学) 今元(武藤) 弘子

37 年前、看護師を目指して北海道の片田舎から出てきた私にとって、東京も看護学校も寮生活も何もかもが初めての体験で緊張と不安でいっぱいのスタートだったことを思い出します。

まず、看護学校では嫌！というほど勉強をした(させられた！？)という思いがあります。私のこれまでの人生を振り返ってみても、あれほど勉強した時期はなかったように思います。(その後たいした勉強や研鑽をしてこなかったということでもありますが…。)3年間で学ぶべき内容がいかに濃密(？)であったかということでしょう。

その学びを支えてくれた寮生活の厳しかったこと、楽しかったこと！寮母の高尾さんには箸の上げ下ろしから、掃除の仕方、廊下の歩き方等々、学生として、女性として、社会人として様々に躾ていただきました。トイレの紙の色は色物ではなく白色を使うようにと言われ、皆で笑ったものですが、高尾さんは常に品性のある人間であれと教えてくださいました。よく叱られながらも親身になって面倒を見ていただきました。

学校・寮が東京・新宿という都会の真っただ中にあり、様々な楽しみや文化に触れるチャンスが多く、あまりお金のかからない催しや遊びを見つけてはよく出かけました。日本の最先端の文化や芸術に触れながら、危険な誘惑にも負けず青春を謳歌したものです。生涯の友人もでき、青年赤十字奉仕団に入って施設で奉仕活動を続けたことも看護の一面を学ぶ貴重な体験でした。互いが仲間でありライバルであった者同士、3 年間同じ屋根の下で認め合い、支えあい、切磋琢磨し、全員が国試を通ったときその達成感は最高でした！あの 3 年間が現在の私の基礎であり出発点となっています。私は現在、病院の管理職として働いておりますが、今まで様々な場面で東医附属出身の看護師であることの恩恵に預かり、誇りに支えられてきました。

25 年度より東医の看護教育が大学教育に代わってゆくことは素晴らしい進歩です。学校や皆様の今後の発展を心より祈願いたしております。東医は永遠に不滅です！

第 3 回生卒業式(昭和 44 年)

学生時代の思い出

三井住友信託銀行(株)人事部健康推進チーム
第 4 回生(昭和 42 年入学) 辻 節子

東京医科大学看護専門学校 50 周年おめでとうございます。4 回生代表で寄稿できる幸せと懐かしさで一杯です。

振り返る事、昭和 42 年入学しました折は高等看護学校となり、4 回生で一学年 25 名、全寮制（一部屋 4 人)、門限 20：00 と青春真っ只中、夢と希望を持って東京での青春謳歌を期待してきた私はお先真っ暗で、「格子なき牢獄」と冗談で言ったりしてました。すぐに寮則改正委員とやらを立ち上げて、門限 22：00 に延ばすことができた頃は 2 年生も終わりの時期でした。3 年生になると卒業試験と国家試験を控え、気持ちはのんびり出来る余裕はありませんでした。一番勉強したようにさえ思えます。何と暗い学生生活と思われそうですが、なかなか経験できないような貴重な生活で、楽しい 3 年間と成りました。

寮生活では寮母さん（故高尾様、有難うございました）に規則正しい生活の大切さ、マナーを教わり、上級生・下級生との共同生活ではコミュニケーションのとり方、社会生活の中での重要性を知らず知らずの間に身につけていました。

また、東医祭では、わいわいと模擬店を出店したり、医学部ワンダーフォーゲル部主催のオープンワンデリングに参加したり、病院実習では各学科の講師の先生方（有難うございました）が教え子としてやさしくご指導、見守って下さり、など楽しい学生生活でした。今でも走馬灯の様に思い出されます。

現在、企業の産業ナースとして社員の健康推進に携わっていますが、東京医大病院には社員が大変お世話になっています。私にとって東京医科大学看護専門学校を卒業し、いろいろな経験出来た事は財産となり、大変光栄でした。

第 4 回生卒業式 同窓会館にて(昭和 45 年)

学生時代の思い出

東京医科大学看護専門学校 元専任教員
第 5 回生(昭和 43 年入学) 加藤 憲子

私が看学に入学したのは、今の高層ビル群の走りでもある京王プラザが建てられ始めた頃である。今や西新宿一帯はビルの林に変貌してしまい、淀橋浄水場跡地だったことを知る人は少なくなり、ススキが生えていたなどとは知る由もない。たまに上京する私は、今や浦島太郎の心境である。

当時、担任の案内で大学の体育館まで歩く途中、高いビルを見上げるたびに眩暈を覚えていたのが嘘のようである。その頃、学校と寮が同じ建物の中にあり、休み時間には自室に忘れ物を取りに戻ることができたほどである。今の学生には想像がつかないことであろう。看護の勉強は勿論のこと、寮生活を初めて経験する私には、珍しいことばかりであった。厳格な寮母さんに見守られながら、さながら嫁入り前の娘のように、いろいろな躾を受けることになったのである。廊下に脱ぎ捨てたスリッパの置き方や入浴時の注意点等々、数え上げればきりがない。先輩の指導もしかり。トイレ掃除の際、汚れた水の入ったバケツを流し場の床に置かないことなど、ちょっと思いつかないようなお叱りも受けた。掃除当番のない日には、少しだけ寝呆しようとしていたら、「起きろ」と言わんばかりにドアをモップの先でコツコツ叩かれたり、と今では笑えるような厳しい指導の毎日であった。3 年生になった時には知らずに同じような事をしていたらしく、のちに後輩から「怖い先輩だった」と言われ、思わず苦笑していたことを覚えている。先輩を「花の 3 回生」と呼び、自分達をひそかに「蕾の 5 回生」と自負していた。

40 数年経た今では、この時の寮母さんや先輩のお陰で、恐い所と不安に思っていた新宿でも安心して過ごすことができたし、成長することができたのだと改めて感じるのである。とにかく懐かしい思い出が沢山あり過ぎて紙面では書ききれない程である。

第 5 回生戴帽式 同窓会館前にて(昭和 43 年)

学生時代の思い出

東京医科大学看護専門学校 専任教員
第６回生(昭和 44 年入学) 板橋(吉田) 和子

開校５０周年おめでとうございます。夢と希望を持って上京し、看護学校を卒業し４０年以上も過ぎていることに驚きと感慨深いものを覚えます。

看護学校の思い出は何といっても寮生活です。入寮当初の頃が鮮明に思い出されます。朝、６時２０分、朝の放送とともに一斉にお掃除。先輩がとても大人びいて見え、ちょっと怖かった。お部屋の先輩たちは優しく４人部屋で食事はほぼ自炊。朝は食パン、キャベツの千切り・魚肉ソーセージにマヨネーズが定番。３年間あきもせずよく食べました。その頃、マヨネーズが苦手だった私は内心どうしようと思いましたが、いつの間にか苦手意識もなくなり、キャベツの千切りが上手になり、魚肉ソーセージやキャベツの千切りをみると懐かしく寮生活を思い出します。買い物は成子坂下の三平ストアへ。今もあるのでしょうか？夕食も自炊。何を作っていたのでしょうか。夕食後、先輩のところにはいつも誰かが来ており、実習の話を一緒に聞くのが楽しみでした。２２時３０分お部屋の電気消燈。時間を忘れおしゃべりに興じていると寮母の高尾さんから注意を受けました。巡回の時の高尾さんは、足音を立てずスリ足で静かに回ってくるので気がつかないのです。テストの前に部屋の明かりが漏れないようにドアのところに紙を張っているところを高尾さんに見つかって「何をなさっているの」と注意を受けました。部屋の明かりが漏れてしまうために押入れに入って勉強した人もいたようです。私は押入れには入りませんでした。懐かしい思い出です。寮母の高尾さんはとてもお上品な素敵なおばあさまでした。(あのころはおいくつだったのでしょうか？)

３年生の時のお部屋は同じ学年同士。後半の部屋替えは国家試験勉強のこともあり、誰と一緒になるのだろうと不安いっぱいでした。私の部屋だけが３人部屋で，３人３様の性格。勉強時間も夜型・朝型バラバラ。こんな３人３様がよかったのでしょう。２人部屋の人は部屋で勉強していると息が詰まるとわが部屋に逃げ込んできていました。卒業試験の時は、集まった人で試験の作戦会議（やまかけ）をしたり、みんながピリピリなっている国家試験前もあまりピリピリすることもなく仲良く最後まで過ごせました。３年間のこのような寮生活で、その人の良いところも悪いところも認め合っていたからこそ一生の友達でいられるのだと思います。貴重な出会いと経験でした。

寮生活もさることながら私達６回生は、教務の先生たちから見たら困った学年だったのだろうと思います。外科の古川先生の「２４歳の女性の患者が手術をするにあたって輸血のＢ型の血液が足らない、協力してほしい」との呼びかけが授業中にあり、調べたら、クラス（２８人）の２／３の人の血液型がＢ型（ビックリです)。病棟に献血に行って２人目の学生が貧血を起こし、教務にばれて「やってはいけません」と止められましたが、私達の意思でやるのだからと反発し、みんなで協力しようと教務の注意は聞きませんでした。が、残念ながらその方は亡くなり献血はしないで終わってしまいました。また、授業中に〇〇先生大風呂敷全集というノートが回って、その日

の授業中で話された自慢話を面白く書きとめるノートでした。授業内容は覚えていないのに脱線した話の内容はよく覚えているものです。私たち６回生は、まとまっていないようでいざとなったらまとまる、教員が同じ方向を向かせようとしてもみんな好きな方向を向いている、そんなフリーチャイルド・マイペースの学年だった様です。私は教員になって初めて６回生のクラス担任だった吉岡先生の大変さをしみじみ感じました。クラス会やミニクラス会も時々開催していますが、参加者が多く楽しく過ごしています。吉岡先生には毎回参加して頂き、誰が先生か学生かわからない状況です。

その様なフリーチャイルド・マイペースの学生が多かった私たち６回生も、看護職であと少し頑張ろうとしている人、定年を迎え、また子育てが終わって趣味を楽しんでいる人と様々ですが、寮生活からスタートした看護師としての人生、あっという間の年月でした。

これからは自分の健康管理をしっかりして、いつまでも６回生の絆を大切に、お付き合いしていきたいと思います。

第６回生戴帽式 同窓会館にて(昭和 44 年 11 月 21 日)

看護学校での思い出を振り返って

東京医科大学看護専門学校 元専任教員
第７回生(昭和 45 年入学) 渡部(外久保) 和子

母校の創立５０周年に際し、同窓生の一人として心よりお祝いを申し上げます。また、この場をお借りし、クラス会や同窓会への日頃のご無沙汰を深くお詫び申し上げます。

思えば、臆病で田舎者の私が母の憧れであった看護師を目指して上京し、都会の新宿で戸惑いながら体験することとなった寮生活が始まりでした。当時、学校は寮とフロア続きになっていて、地下に設けられた階段教室や実習室で級友と共に学んだ日々は、４０年を経た今でも懐かしく蘇ります。授業にお見えになる諸先生方はとても個性に溢れ、私達はその親しみやすい先生方の魅力に反応し、楽しんだように思います。看護技術の授業では、白衣姿の先生方がきめ細やかに講義や実技の指導をして下さいました。病棟実習では、看護者として本来どうあるべきなのかとあがいてみるものの、見当違いな考えしか浮かばず途方にくれるばかりでした。そして、教室の壁に掲げられた「自主自学」の精神が、自らの姿勢と随分かけ離れていることに、心のどこかで後ろめたさも感じたものです。やがて迎えた卒業の日、同窓会館のホールで行った謝恩会では、巣立ちの思いを込めて級友が作詩した「ひよこ」の朗読や琴の演奏など、簡素ながらも工夫を凝らし、思い出深いひとときを過ごすことができました。以来、「ひよこの会」が誕生し、いつしかお互いの還暦を祝うまでになりました。

卒業後私は病棟で４年間勤務をした後、教員として８年間母校のお世話になり、あらゆる面で自分の未熟さを痛感すると共に、むしろ多くのことを学ばせていただきました。看護職を離れて久しい今、改めて看護学校を絆とする交友の喜びを思う時、看護を通じた掛け替えのない出会いに支えられている自分を強く感じ、感謝に堪えません。

最後になりましたが、母校のますますのご発展と、皆々様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

第７回生入学式 同窓会館にて(昭和 45 年)

学生時代の思い出

東京医科大学看護専門学校 元専任教員
第８回生(昭和 46 年入学) 曽山(磯田) 紀子

この４月、待望の４年制医学部看護学科の開校、そして看護専門学校の５０周年と記念すべき年を迎え、おめでとうございます。

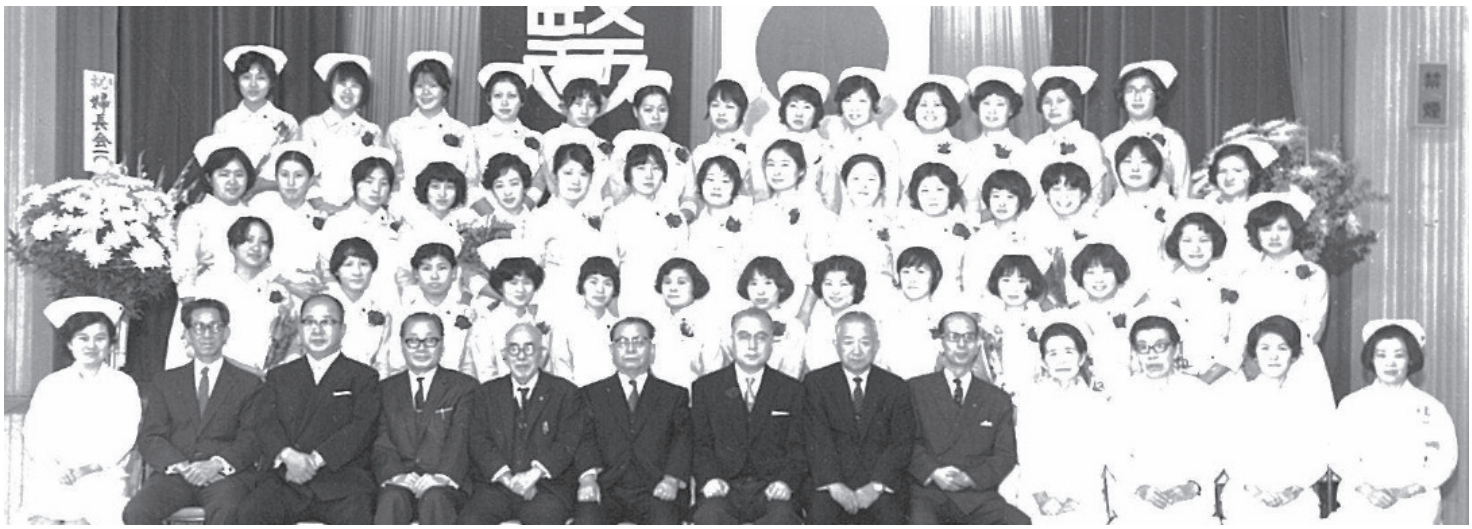
昭和４６年、まだ病院敷地内に看護学校があった頃です。新宿新都心計画途上で京王プラザホテルが建ち、その周辺はまだ空き地でした。西新宿には緑がたくさんあり、今の高層ビルからは想像もつかない環境でした。学生運動がやや下火になり、全国に看護婦不足、美濃部革新都政で看護学校が増設された時代でした。

入学試験の面接のとき、３年先輩の方と話をする機会があり、その時の実習ユニホームに包まれた先輩の輝かしい姿は、とても強く心を打ちました。「私もこの学校に入ってこの先輩のようになりたい！このユニホームが着たい！」と強く思いました。

学校と隣接した寮生活、１年先輩の方と同級生２人と３人の共同生活。先輩の優しかったこと。日常生活のこと、勉強はもちろん実習での体験をいろいろ教えて頂きました。地下実習室での看護技術の演習、階段教室ではよく居眠りをして、「眠れる地下の姫たち」と言われました。待ちに待った戴帽式、キャンドルに照らされ、「ナイチンゲール誓詞」を清い心で誓ったことは感動的でした。基礎実習で初めて受け持った肺癌の患者さん、何もできないもどかしさ、しかし看護の心を芽えさせてくれた忘れられない人です。大学祭での運動会、楽しい思い出は尽きません。

昨年１２月、３年間担任された杉浦先生を囲んでのクラス会では、２５人も集い、４０年の歳月がタイムスリップして旧交を温めました。今年、春の叙勲でクラスメートの渡辺まつ子さんが瑞宝単光章を受章されました。８回生としては栄誉ある出来事です。

皮肉にも看護専門学校は、５０回生を最後に半世紀の歴史が閉じることになり寂しいことですが、これも時代の流れとして受止めたいです。これからも同窓生の益々のご活躍、ご発展を祈念いたします。



第８回生戴帽式 同窓会館にて(昭和 46 年)

看護学生時代を振り返って

第 9 回生(昭和 47 年入学) 板垣(黄) 早苗

そうそう思い起こしてみると受験のために東京医科大学看護専門学校を訪ね、初めてお話した方が亀川先生でした。9 回生（36 名だったかな）となって通学生が三割を占め、社会人から看護学生となった人も他の学年から比べると多かったように思います。(私もその一人でした) 階段、円形教室での座学、決められていなかったのですが、いつのまにか定席でした。戴帽式を経て病棟実習、緊張だったなあ。記録と事前学習が、足りなくて指導頂いたこと。学園祭、解剖学などの授業では、厚生年金ホールを目当てに医大へいったこと。修学旅行は、飛騨高山だった。夏休みにバイトなどなど。その後の南 5 階での勤務、外科 1・2・3 班の回診、腎臓移植、ブロンコファイバーによる治療、90 歳の方が胃全摘をされ退院していかれたこと。その頃の私にとっては、とても先進でした。看学の同級生、先輩、後輩、教員の方々、病棟の婦長さん、主任さん、ドクター、同僚の方々、今回の原稿依頼で、懐かしく思い起こさせて頂きました。

現在、私は、その頃の縁で静岡県函南に嫁ぎ四人の子育てを経、義母（90 歳）も元気で居てくれていますので、ディケアに携わっています。

東京医科大学看護専門学校の看護学生からが、私の看護の原点です。ありがとうございます。感謝です。創立五十周年おめでとうございます。

第 9 回生 戴帽式 同窓会館にて(昭和 47 年)

創立 50 周年を迎えて思う事

東京医科大学病院 看護部 教育担当師長
東京医科大学看護専門学校 元同窓会会長
第 10 回生(昭和 48 年入学) 須佐(金田) 真由美

同窓生の皆様、10 回生の皆様ご無沙汰しております。いかがお過ごしでしょうか。

私は、平成 23 年 8 月から教育担当として勤務しております。4 月に新しい仲間である新入職者を迎えオリエンテーションや研修等で多忙な毎日を過ごしています。

早いもので、看護学校が創立 50 週年を迎えることになりました。私も四捨五入すると 40 年近く勤務していることになります。私の同期は早々と退職したので、勤続年数の半分以上は同期生がおらず私一人でした。複数の同期生が一緒に勤務している同窓の看護師をみると羨ましくも思いました。

しかし、同期生はいませんが、最初に勤務した西館 3 階病棟(今は存在しない建物)の仲間のうち、現在も東京医大に勤務している仲間とは、大学の創立記念日に集まり、昔話に花を咲かせて楽しいひと時を過ごしています。私は、この仲間をはじめとして、上司、同僚、後輩たちに支えられて、長い間、勤めることができたのだと改めて感謝しています。

また、創立 50 周年を迎えたその同じ年に看護学科設立が実現したことは、二重の喜びとなりました。今後、看護学部と大学病院がお互いに連携、協力し合い、看護の質の向上と看護体制の整備に向けて取り組めればよいと考えております。

そして、東京医科大学病院が看護師にとって、専門職として自らのキャリアを発展させながら、働き続けられる職場環境になるように微力ではありますが頑張りたいと思います。

第 10 回生入学式 同窓会館にて(昭和 48 年)

寮生活の思い出

第 11 回生(昭和 49 年入学) 鈴木(真木) 良子

１９７４(昭和４９)年は、田中角栄首相が金脈問題で政界を追われ、その反動でクリーンなイメージの三木武夫内閣が誕生した年でした。そんな騒々しい世の中の出来事とは無縁な私は、山形からひとり東京医科大学附属高等看護学校本科寮に入寮しました。

知り合いは、誰もいませんでした。９畳程の部屋に上級生１名、新入生２名、合計３名１部屋での全く知らない者どうしの寮生活が始まりました。入学当初数カ月は、どのような生活をしていたか、あまり覚えがありません。夢中だったのでしょう。しかし、学校と寮とは繋がっていましたので、寝起きで頭髪もボサボサのまま講義に出るようなこともたびたびあったことは覚えています。２年生の先輩と１年生２名での団体生活では、朝食もいっしょに準備をしていただいたり、特に先輩には大変お世話になりました。自分が２年生になると逆に１年生２人との生活になりました。自分が先輩にお世話になったように、１年生をお世話する立場になりました。そして、３年生になると、３年生同士２人での生活となりました。一つの部屋で２年間は３人が寝食を共にして、最後の３年生の１年間は２人となり、３年間いろいろ目ざわりなこと、気に入らないこと、気を使うことも多くあり、当時は悩みも尽きなかったのでしょうが、いやな思い出はなく、今思えば、日常生活においてもみんなでお互い協力しながら３年間やってきたなと懐かしい思い出しか残っていません。現代社会では考えられない生活ですが、これが社会生活技能訓練（Social Skills Training）通称 SST の始まりでした。

この寮生活での３年間があったからこそ、どのような患者さんに対しても対応できる能力が養われ、どんな人ともチームを組んで仕事ができ、３０年以上も看護師として続けてこられたのかもしれません。今の自分の基礎を築いてくれた寮生活に感謝です。

第 11 回生入学式(昭和 49 年)

今、感謝をこめて

第 12 回生(昭和 50 年入学) 高橋(児玉) 智恵子

答辞

長く厳しかった冬が過ぎ、新潟にもようやく春がやってきました。窓の外は桜が満開です。

12 回生の皆様こんにちは。皆様におかれましては充実した毎日を過ごされていることと思います。看護学校も 50 周年を迎えるとの事ですね。月日のたつのは本当に早いと感じています。東京で過ごした学生時代の 3 年間は、私にとっては宝物のような思い出がたくさん詰まっています。初めての寮生活で友達の部屋を行き来して語り合った日々。一緒に食事作りをした事。国試前での勉強で励ましあった事。ホームシックにかかり寮の屋上で高層ビルの光を見ていたら涙で滲んだ事。今となってはどれもいい思い出です。

卒業後 3 年半、大学病院で働き、その後新潟に戻りました。新潟の病院で 2 年働き結婚し、3 人の子供達も独立し、今は社会福祉協議会の通所介護施設デイサービスの看護師として働いています。介護職や相談員や介護支援専門員と連携を取りながら、高齢者や障がい者の方々のケアにあたっています。病院で働いていた時とは違ったむずかしさや楽しさを感じています。日々の出来事が学びであり、さまざまな人々との出会いに感動を覚え、それらを積み重ねて成長させていただいています。認知症があっても障がいがあっても尊厳をもって生きていく、そのお手伝いをさせていただいています。いろいろな人との触れ合いの中で思う事は、人生はきっと成功も失敗もなく、ただあるのはその人のかけがえのない人生だけだという事です。

私事ですが、中越地震で実家が被災したり、最愛の兄を病気で亡くしたりと、心が折れそうな出来事もありました。しかし、支えて下さった方々のおかげで今があります。今は、兄が残してくれた言葉である、いつも笑顔で前向きに・人の話をよく聴く・やさしい気持ちを忘れないを心の中に置いて日々を送っています。

第 12 回生卒業式 同窓会館にて(昭和 53 年) ※12 回生から学生数 80 名定数に増員

出会いに感謝して

第 13 回生(昭和 51 年入学) 間野(津々木) 和美

五十周年おめでとうございます。建設中だった安田火災ビルを初めて見上げ、圧倒されたあの頃を思い出します。今、学ぶ後輩たちは変化の激しい中、違う様相をみせる西新宿の地で奮闘されていることと思います。

只々、一生懸命だった学生時代、実習の中で机上とは違う患者様の生身の言葉に接し、学ばなければならないことの大切さを痛感したものでした。今でも看護師として仕事を続けていられるのは、東京医大で接した多くの方々に学び助けられ、今の自分があること、原点になっています。私にかかわって下さったお一人お一人の顔が、今も浮かびます。整形外科クリニックから最近一年間は、機能訓練型の介護施設に身を置き、また違った形で多くの方々との出会いに恵まれました。そこでの出会いも、年齢を重ね生きてこられた方から発せられる言葉に心揺さぶられ、おかれた現実を受け止めた方の言葉の深さ重みに接し、濃縮された日々の連続でした。今また、出会った方々に勇気をもらい、新しく開院するクリニックの準備に奔走しています。開院を前に、これからどのような方々に出会っていくのだろうとワクワクドキドキしている現在です。

出会う方々に日々気づかせてもらい、成長し続けられる私達の仕事は、大変さの中にも喜びがあると感じています。体力が許す限り、この仕事を続けていきたいと思っています。私にかかわって下さった先生はじめ、すべての方々に感謝して。

皆様のご健康をお祈りしています。

13 回生戴帽式 同窓会館にて（昭和 52 年）

認定看護管理者として

第 14 回生(昭和 52 年入学) 北野(鹿野) 貞

創立 50 周年おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

同窓生の皆様におかれましては、全国各地・多様な場で御活躍のことと存じます。

私は看護学校を卒業後、東京医大病院入職、ＮＩＣＵ立ち上げ、病院新築・移転を経験、13 年半勤務いたしました。現在は兵庫県で看護管理者として企業立の病院に勤務しております。結婚後は子育てに専念し、人生の中で大変貴重な幸せな時を過ごしました。その後、専業主婦生活に危機感を感じ、自己研鑽しながら現場復帰の準備をし、看護の現場に戻りました。地域・在宅、看護学校の専任教員を経て、5 年前より臨床で教育を専従で担当、この春看護部長を拝命し、現在に至っています。

5 年前勤務していた看護学校が閉校になり、残りの看護人生何を極めるべきかと考えた時、臨床現場での教育や看護管理を深めることが私の使命と判断し、臨床に戻りました。管理経験は乏しい現状でしたが、現場や人々に恵まれ研修・学習を積み重ね、昨年認定看護管理者となりました。私が現在この地(兵庫)で今の職務が遂行できるのも、原点は東京医科大学看護専門学校の教育基盤があり、東京医大病院で培った知識・技術・専門性の実務経験の積み重ねに基づくものだと思っています。苦楽を共にしてきた同級生の支えや励まし、就職後共に学び叱咤激励し合ってきた同僚の助けや支えも大きな力でした。多くの人との出会いや経験は、私の宝物です。その 16 年半があったからこそ、今があるのだと感謝しています。

医療・看護界も大きく変化し病院の機能分化、地域との連携強化・看護の専門性、看護教育の充実等看護専門職として求められるものも多様化してきています。管理者として看護師が専門職としての責務を果たせるよう、そして、各個人のライフスタイルに合わせキャリアアップしていける職場をめざして、日々奔走しています。激動の時代、時流をキャッチした先駆的活動を視野に入れながら、看護の本質を追究した看護管理をしていきたいと思っています。

第 14 回生戴帽式 同窓会館にて(昭和 52 年)

卒業して30年を迎えて！

第15回生　桜井(小野田) 二三江

みなさん、ご無沙汰しております。15回生 桜井 二三江です。本年は看護専門学校創立 50 周年を迎えると聞き、大変嬉しく思うと同時に、卒業して30年を過ぎている事に感慨深いものを覚えます。

私は現在、新宿の人間ドック専門のクリニックで働いています。予防医学という事で、みなさん自分の健康にはかなり関心を持ち、毎日 80 人前後の健診をこなしています。特に内視鏡検査を受けられる方は年々増加しており、予約がなかなか取れないのが現状です。少しでもお客様のニーズに応えられる様、日々、院長スタッフと協力し、絶対無事故で少しでもお客様が楽に検査が終了するよう心掛けています。

ところで、2年前の3，11の大震災で私の故郷 福島県南相馬市が原発から20㎞圏内に入り、母姉妹家族、合計15名が私の家へ一時避難をするという過酷な生活がありました。現在は少しずつではありますが、落ち着きを取り戻し始めていますが、原発による避難生活はまだ続いています。当時、職場の先輩や友人から沢山の援助を頂き、この紙面をお借りして感謝とお礼を申し上げます。震災を通して改めて日本人の温かさ、家族の絆の強さ、そして命の大切さを教えていただきました。

最後に、いつもご尽力下さる同窓会役員の方々に感謝致しますとともに、15回生の皆さんのご活躍を心からお祈りしています。

第15回生入学式(昭和53年)

１６回生からのメッセージ

第 16 回生(昭和 54 年入学) 吉野(安井) 万里子

同窓会(平成 23 年)

創立５０周年、おめでとうございます。

私達、１６回生が本校の門をくぐったのは、今から３０年前、まだ青梅街道沿いに病院の正門があり、その地下の休憩室ではそばを走る丸ノ内線の轟音が聞こえ、ネコマタ（猫もまたいで通るくらい？）食堂、西館、５病棟、光和寮、清和寮が存在した時でした。

学生生活は大学の基礎新館で、同時に大学との部活交流もはじまり、その通学路は石神井の扇山ハイツから、ディスコブーム、バブルに浮き立つ歌舞伎町を、ハマトラ、ニュートラファッションで通過するというものでした。私は自宅から通学していましたが、そんな通学生とよばれるのは十数名で、大半は東北から九州まで全国から上京してきた方たちで、よく、方言や食べ物の違いの話題で盛り上がったものです。

一昨年、同窓会で５０才となり再会した時、お孫さんがいたり、お子さんが看護学生、医大生というのに驚きつつも、みんな、あの看護学校当時の面影そのままで、その時の気持ちがよみがえり笑い語りあえました。老眼、物忘れが話題になる年齢ですが、今も東医で働いているたったひとりの同級生をはじめとし、全国各地で、病院、医院、介護施設、地域医療と、活躍している友をみると頼もしく思います。このような友をみて、看護職は、やはり天職であり、人生経験がそのまま看護の質の向上につながり、また看護職経験が日常を、さらに人生を支えていくと痛感しています。

今、日々揺れ動いているであろう若い後輩の皆さん、そのひとつひとつは決して無駄にはならず、自分の看護職、さらには人生に必ず役立つものと信じてがんばってほしいと思います。ますます、厳しく多様化する時代、強くそして愛に満ち溢れた看護師が育つよう期待し、陰ながら応援させていただいと思います。

第 16 回生戴帽式 記念会館にて(昭和 55 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 泌尿器科外来 主任
第 17 回生(昭和 55 年入学) 蓮見(小泉) 和子

開校 50 周年おめでとうございます。と同時に医学部看護学科が開設され『東京医科大学看護専門学校』という母校がなくなることは寂しいですが、大学化への思いが実現しましたことは輝かしい限りです。

入学当初、『自主自学』の 4 文字を突き付けられた時、高校時代までのただ与えられるものを消化していただけの環境から、場違いな所に来てしまったのではという後悔とここでやっていけるだろうかという不安を抱き、自問自答しました。また、初めての寮生活(今はなき光和寮・清和寮)も個室と思いきや相部屋の薄暗い部屋…学食があるのかと思いきや自炊…色々な意味でびっくり仰天からのスタートでした。

振り返りますと、この看護学校・寮生活が社会人として歩むために大切なものを習得する 3 年間であり、先輩方から沢山のお作法を伝授して頂きました。元気に挨拶する、正座し話を聴く、集団浴室の入り方、仲間を大切にする等、時に厳しくもありましたが、それも愛情の裏返しであり少しの事では挫けない精神力も身につきました。また自信がなく自己否定ばかりの私は、ある担当教員に自分の存在価値を認めて頂き、救って頂きました。「こんな自分でもいいのかな…」と心の霧が徐々に晴れ、安堵感を得て歩み出せた事を記憶しています。

その体験が今の私を作り上げています。そして苦楽を共にした仲間の存在こそ、3 年間を乗り越える原動力であったことは言うまでもありません。今では信じられない事ですが、実習中「お前達はゴキブリ、あっちへ行け！」と師長さんに叱られ、自分達は人間ではないのだと落胆しましたが、邪魔ばかりの私達には的確な表現でした(笑)。

17 回生の仲間はお互いを認め合える宝です。人に支えられ『感謝』を胸に今東京医大病院で働いています。皆様のご活躍を祈念致します。

第 17 回生入学式 記念会館にて(昭和 55 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 16 階西 指導係
透析看護認定看護師
第 18 回生(昭和 56 年入学) 神保 洋子

私の学生時代の思い出は、今はもうなくなってしまいましたが、上石神井台にあった扇山ハイツでの寮生活です。あの時代は、ほとんどの学生が地方から上京していたこともあり、ほとんどの学生が扇山ハイツでの寮生活でした。そのため、毎日、西武新宿線の上石神井駅から新宿までの通学路ほとんど顔見知りばかりでした。私が専門学校の入学のため寮生活を始めたころは、一部屋に１年生２人、２年生１人、３年生が１人の４人部屋で、誰も知らないところで一緒に先輩方と生活することに緊張していた自分に、先輩方が優しく迎えてくれ、一緒にご飯を食べたり、うれしかったことが思い出されます。また、先輩方には、勉強や実習の事、テスト問題などいろんなことを教えてもらいました。

食生活は自炊のため、学校帰りに上石神井台の丸正によって夕食の材料を買って帰る人がほとんどでした。あの時代は、バイトは禁止されており仕送りで生活していたため、田舎からの食糧が送られたりするとお互いに地方の名産など御裾分けして味見をすることができました。また、ある時は友達の部屋へ行って一緒にご飯を作って食べたり、夜遅くまで数人の仲間と話したり勉強したり、寮生活にはいろいろなイベントも行われました。寮の庭には竹藪があり、春にはタケノコを寮母さんと採ったこと、たまに近くの銭湯へも行きました。学年が上がってくると、国試のため３年生は３階の部屋に移り勉強に励んでいたことを思い出します。卒業と同時に退寮したときはとても寂しく感じました。

その後３０年近く過ぎようとしていますが、あの寮生活での先輩や友達とのふれあいがあったからこそ、大変な勉強や実習を乗り越えられ、また、今の私の人間関係のありかたがあると思っています。

第 18 回生 グランドにて(昭和 59 年)

私の 30 年間を振り返って

福生市社会福祉協議会高齢者在宅サービスセンター田園
第 19 回生(昭和 57 年入学)　久保(曲渕) 睦子

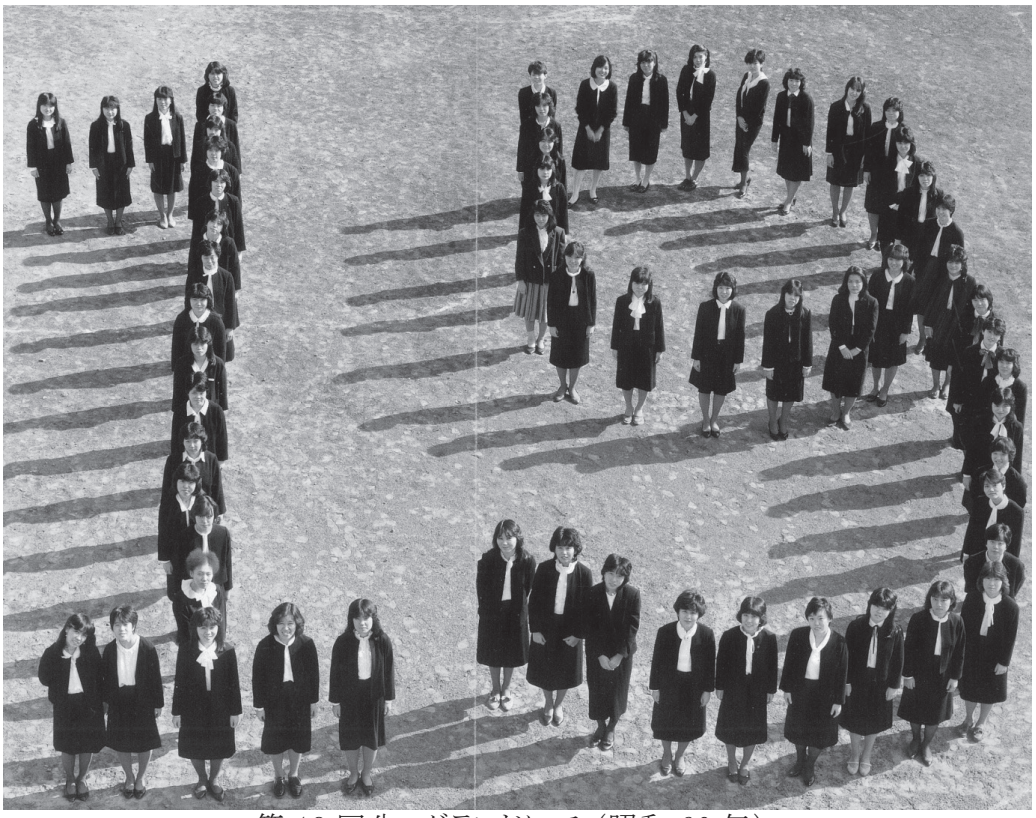
東京医科大学看護専門学校 50 周年おめでとうございます。

私の看学時代を思い出すと、テストと実習に明け暮れていたように思います。私は、通学生でしたので、寮生から先輩のテストをコピーさせてもらうのに必死になっていたり、病院実習では、命の尊さ、看護の厳しさ・楽しさを実感することが出来ました。今思うと、あっという間の 3 年間でした。卒業式では充実感がいっぱいで、涙が止まりませんでした。

卒業後は、第一希望の中央 4 階一般外科に就職しました。今は亡き千葉師長より、「看護師はナースステーションに居てはダメ、患者のいるベッドサイドに居なさい」と、教えられました。この言葉は、いつも私の心の中にあり、私の看護の基本となっているように思います。

結婚を機に退職し、その後二人の息子に恵まれ、専業主婦となりましたが、いつかはまた看護の仕事に就きたいという気持ちは常にありました。10 年のブランクを経て、リハビリ専門のデイサービス、そして現在の職場での看護の仕事を続けています。東京医大病院での師長、先輩、後輩の方々、また家族の支えがあって看護の仕事を続けていられることの感謝と喜びの気持ちでいっぱいです。これからも出来る限り仕事を続けていきたいと思います。

最後に、東京医大看護専門学校が今後もますます発展し、多くのステキな看護師が巣立っていけるように切に願います。



第 19 回生　グランドにて（昭和 60 年）

たくさんの人に育てられて

第 20 回生(昭和 58 年入学) 河口(岩崎) 静子

私が入学したのは30年前、なんと言っても学生時代の実習は乗り越えなければならない大きな山という感じだった。学生時代も病棟ナースになってからも、私は多くの人たちに育てられたと思う。

ある内科病棟の実習で、早朝星空を仰いで登院した日、少し早く着きすぎたなと感じながら、初めての小オペ出しを前に何をしてよいかわからず指導者の看護師さんが来るのを待っていた。看護師さんが来て状況を見て、すかさず「あなた、朝早く来て何やってたの！ストレッチャーのシーツをきれいに整えるとかやることがあったでしょ。」と怒られた。その時は「きついなァ」と思ったものだったが、その言葉が今となっても私の行動の指針の一つになっているように思う。

その後の様々な場面において「今、自分はこの状況で何が出来るか」を常に考えるクセがついたように思う。考えることが出来れば気づくことが出来、行動に移せる。元来ボーッとしている事が好きな私にとっては、少しでも人のお役に立つ事ができる人になるための宝の言葉だったように感じるのである。

実習に出れば、患者さん、看護師さん、その他たくさんの人たちと接する。その人たちが自分の気づかないうちに大事なものを与えてくれる、まさに私の師達であったと思う。

病棟の先輩ナースが夜勤帯の綿球準備の仕事について「私は次の勤務帯で綿球がなくて困ったって事がないよう、次の人のことを考えて仕事している。」と語ってくれたことがあった。その言葉を聴いて、私も次の人のことを考えて仕事をしようと意識するようになった。

これらの言葉は自分を活かしてくれる糧となり私の中に根付いている。

実習中などの一見苦いと思える事も、案外その後の自分を育ててくれる経験となって、後から輝き出すのではないかと思う。

在校生のみなさん、どうぞ素敵な、患者さんの味方になれるナースになってください。応援しています。

第 20 回生　高橋卓也先生像前にて（昭和 61 年）

私の選んだ道

小松看護学校 専任教員
第 21 回生(昭和 59 年入学) 北川(東) 和美

東京医科大学看護専門学校５０周年おめでとうございます。卒業生のみなさん、お元気ですか？

東医を卒業して１年半で石川県に行き、今年で２５年が経ちました。そのまま子育てに追われ９年間専業主婦で過ごし、その後復職。ＩＣＵ勤務を経て、現在は教員をさせていただいています。私は自ら志願して教員の道を選びましたが、それは「厳しくとも楽しく充実していた毎日で、東医での学びは一生の財産だった」という事を日々臨床で実感し、私も教員として学生にそのような関わりをしていきたいと思ったからです。

しかし、いざ教員になってみると、古い考え方や閉鎖的な環境に悩み、私が目指していた教員像は一体なんだったんだろうと辛い毎日でした。そんな時、偶然卒業時の論文や実習記録が出てきました。２０数年ぶりに目を通した学生時代の記録。そこには、今まさに私が教えている年代の学生と同じ年令の自分がそこに居て、教員や指導者の励ましやｱﾄﾞﾊﾞｲｽで、変化し成長していく姿がありました。教員になった今の自分に、当時の自分からメッセージが届いたかのようで「看護師になりたい学生を精一杯支援していく」という初心に戻ることができました。その後石塚先生のもとに行き、私の悩みや心境を聞いていただきました。そこで感じた事は、昔と変わらない先生の学生に対する愛情でした。

私には誇れる母校と温かい恩師の存在があることを改めて実感し、私も学生にとってそのような存在になれるよう頑張っていこう、とその日から心に決めています。これからも悩み行き詰る事があるかもしれませんが、今の気持ちを忘れず、学生を大事に育てるという信念と教育観を持って自分の選んだ道を歩いていこうと思っています。

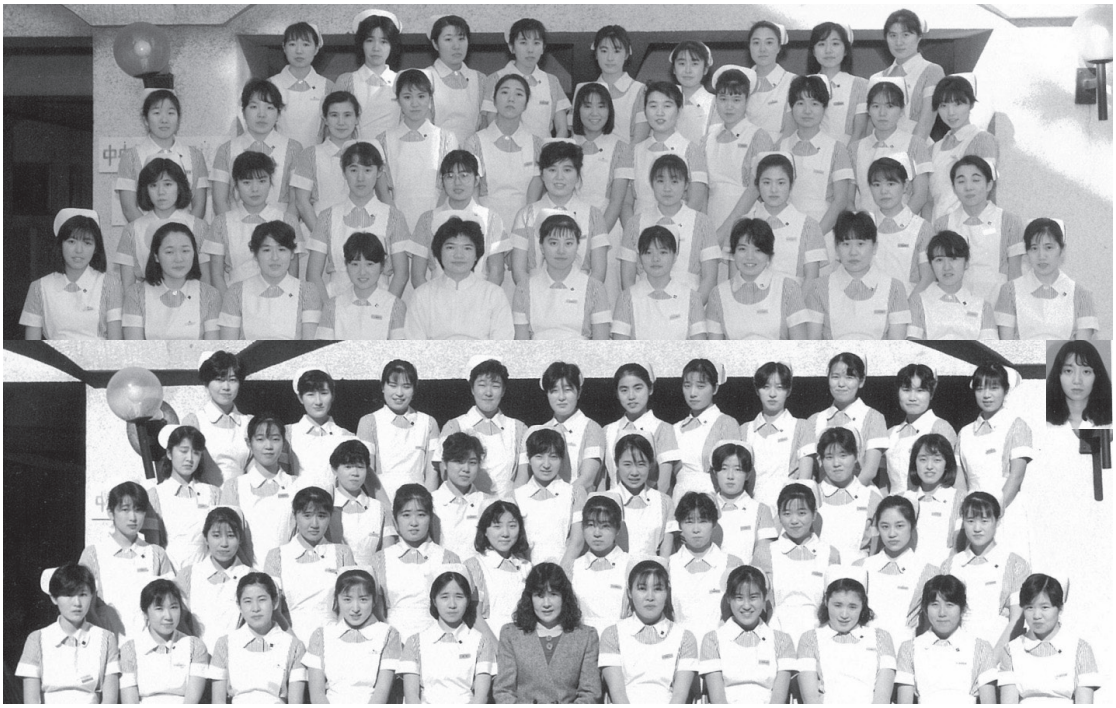
第 21 回生　高橋卓也先生像前にて(昭和 62 年)

卒後２５年および看護学校５０周年の節目にあたり

東京医科大学病院 9 階西　主任
第 22 回生(昭和 60 年入学) 牧野　ゆみ

私が看護学校を卒業してから早 25 年が経ちました。そして、看護学校は 50 周年を迎えようとしています。学生の頃は、こんなに長く東京医大病院で勤務するとは思ってもいませんでした。外科の病棟から始まり色々な科、病棟を 7 か所も異動し、気づけば人生の半分以上を東京医大病院で過ごしているわけで、これも周りにいる同窓生の方々のお力添えがあってこそのことだと思っております。幸いにも本院には私の同期が私を含めまだ 6 名在籍しており、院内で顔を合わせると 25 年という歳月が嘘のように、学生の頃がつい昨日のように思い出されます。学生の頃は、毎日朝も早くから実習に通い週末には学科の試験、記録には追いまくられ早く卒業して看護師として働きたいと思っていましたが、看護学校の 3 年間は楽しく愉快で頼りになる先生方やクラスメイトのおかげで思えばあっという間に過ぎていました。学校生活はもちろん大変でしたが、お昼時間みんなで買いに行った裏のパン屋さん、話足らず 1 時間以上も立ち話をしていた帰り道、先生たちの物まねをした修学旅行、みんなで歌った実習の替え歌、今はほんの少しだけあの頃に戻ってみたい気もします。

看護学校も看護学科へと変貌を遂げ、看護というものも時代とともに変わりつつある中で、卒後 25 年四半世紀を東京医大病院で過ごし、井の中の蛙になりつつある私も変わっていかなければいけない時期なのかもしれません。クラスメイトや同窓生の方々が色々な方面で活躍されている事を同窓会便りなどで知る度に嬉しく思うとともに、自分の可能性を追求するには遅すぎると言う事はないのではないかと勇気づけられる気がします。卒後 25 年看護学校 50 周年と言う節目に気持ちを新たに今後も頑張っていきたいと思います。そして同窓生のみなさんクラスメイトのみなさんの更なるご活躍を期待しております。



第 22 回生　中央校舎前にて（昭和 63 年）

学生時代の思い出

第 23 回生(昭和 61 年入学) 根岸(大元) 裕子

50 周年おめでとうございます。50 年という節目を一緒に迎え、お祝い出きた事を嬉しく思います。また同時に、時間の流れを感じています。

私自身はこの学校が好きで、ここで学べた事を誇りに思っています。看護師として働くようになり、臨床に出て新たな発見ができるのも、学生時代に培った基礎があるからだと思っています。

50 年という節目で看護学校は専門学校から大学へと変わります。看護も日々進歩していて、医療が進歩するにつれ、より繊細さを求められます。分野も疾病だけでなく予防や健康促進、災害救助など拡大しています。しかし、人間らしく生きるために援助するという根本にあるものは不変だと思います。

私がここで学んだ頃は、一学年は同世代で女子だけでした。看護学校のサークル活動があり、他の学年と一緒に活動していました。そして、東医祭にも参加していました。また、1、2 年生合同の宿泊研修や、3 年生での修学旅行がありました。体育の授業では、学内の他、神宮プールへ行き水泳やスケートをしました。制服もありました。黒のシャネルスーツで、行事ごとに着ました。入学式の時に 3 年生が美しく着こなしているのを見て感動しました。学生寮もあり半数以上の学生が入寮していました。だから、日本中から集まっている感じでした。私は通学生でしたが、寮生の話を聞くと羨ましく思う事もありました。懐かしい大切な想い出です。

時代の流れと共に、学校のカリキュラムは変わり、共学になりました。しかし、『自主自学』の理念は不変です。ここでの学びを今後にもつなげたいと思います。

ここで学ばれた皆様のご活躍とご健康をお祈り申しあげます。

第 23 回生　高橋卓也先生像前にて(昭和 63 年)

学生時代の思い出

東京工科大学 医療保健学部 看護学科
第 24 回生(昭和 62 年入学) 金子(坂本) 多喜子

創立 50 周年心よりお祝い申し上げます。

私は、現在東京工科大学にて勤務しています。看護学生の頃は学校がイヤでイヤで、よく欠席可能な時間数を計算して単位認定のギリギリまで休み、呼び出されてご指導を受けるなど、いわゆる要指導学生でした。それが何を血迷ったか、今は看護学を教える身となり、あの頃の先生方のご苦労を実感するとともに、どこかで学生に強く言いきれない私がいます。

こんな私が 24 回生の卒業時には、忘れもしない全員ジャンケンで負け、答辞を読むことになり大変悩んだことを思い出します。涙もろい私を知っている同級生からは、「読む時、泣かないでよ」と先手をうつご指導もあり、緊張至極でした。その時読んだ答辞を、この機会に読み返してみました。答辞の原稿は、学生時代から唯一持ち続けている厚さ 4cm 程の『ナイチンゲール著作集　第一巻』書籍に挟んでいました。「今日はこうして盛大に卒業式を挙行していただき…私達はこの三年間で習得したものを、与えられた職務の中で全うするだけでなく、常に自己に対する批判と反省をもって、決して自らに慣れることのないように戒めていかなければならないと思います…。」なかなか要指導学生とは思われないように頑張っていました。

さて、果たして今の私は当時の自分に向き合えるでしょうか。あらためて身の引き締まる思いです。

この喜ばしい創立 50 周年の記念誌に言葉を寄せる機会をいただきありがとうございました。さらなる母校の発展とともに、50 年の礎が引き継がれることを願っています。

第 24 回生 高橋卓也先生像前にて(平成元年)

私の看護の出発点

第 25 回生(昭和 63 年入学) 那須 淳子

看護師を目指し私が長野の田舎から上京したのは、ちょうどバブル経済真っ直中の頃でした。看護師の仕事が3Kとも5Kとも言われていた時代、一般の大学に進学した友人をなんとなく羨ましく思い、なんで看護学校に入学したのだろうと、目の前の状況に不満を持ち日々過ごしていたように思います。記憶にあるのは楽しかったことよりも、とにかく常に何かに追われていたこと、実習記録大変だったな～ということです。こう書いてみると、なんだかとても暗くつまらない学生時代、「私の青春を返して！」と言いたくなってしまいますが、そんなに悪くはなかったと思っています。いま看護に携わっていられるのは、東医で共に学んだ友と先生方に出会えたからと確信しています。遠く離れても看護について熱く語り合える同期がいること、今でも温かく見守り支えてくださる先生方がいることに感謝しています。現在、私は地元の看護大学で教員をしています。前向きに患者と関わる学生の姿を見ながら「こんなに一生懸命に私はやっていたかな？」、「私もそんな教員になっているのかな？」と自分に問いかけます。東医を卒業し 20 年以上、医療や看護技術は進化し、あの頃教えていただいた方法と変わったものもありますが、学生時代に学んだ看護で大切なことは今も変わっていないと実感しています。誠実な態度や優しい心、改めて私の看護の出発点は東医であること、東医で学んだことを誇りに思っています。

第 25 回生　修学旅行　サイパンにて(平成 2 年)

学生時代を振り返って

第 26 回生(平成元年入学) 岩崎(發知) 由美

東京医科大学看護専門学校の創立 50 周年、おめでとうございます。そして 26 回生の皆様、ご無沙汰していますがお元気でお過ごしでしょうか。私達が卒業後、約倍の人達が看護の道を歩んでいると思うと、月日の経つ事の早さと自分の年齢をしみじみと感じます。

学生時代は、実習やレポートで時間に追われる毎日でしたが、一方でコンサートやテレビの収録を見に行ったり、友達の家で一晩中おしゃべりをしたりと、時間をとても有効に使っていました。仲間と励まし、支え合いながら夢に向かって努力した、それまでの中で一番充実している時期でした。暑い夏の休日、実習担当の先生と仲間で患者会に参加したことや、悩み、躓いている時に先生や指導者さんからいただいたアドバイス、病棟スタッフの看護への厳しい姿勢など、折に触れ記憶の奥からよみがえってきます。卒業後、地元の病院でスムーズに勤務ができたり、雑誌への研究論文の発表や学生指導に携われたのも、学生時代の経験が濃く豊かなものだったからだと感じています。

離職後、市の愛育班活動で知識を役立てている時期もありましたが、現在は子どもの部活動で救急セットを持って走りまわりつつ、自分を生かせる場所を模索しています。

50 年の歴史に幕を閉じるのは寂しいことですが、看護専門学校の礎の上に東京医科大学医学部看護学科としての歴史を積み上げ、発展していくことを期待しています。

第 26 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 3 年)

卒後 20 年を迎えて

東京医科大学 医学部看護学科 准教授
第 27 回生(平成 2 年入学)　竹内(柴田) 久美子

私たち 27 回生は、平成 5 年に卒業し今年で 20 年を迎えました。看護師となってから 20 年、人生の約半分を看護師として生きてきたことになります。昨年度 20 年振りに、卒業式に舞い散るさくらと後輩の輝く瞳を見る機会がありました。20 年前と変わらず温かく卒業生を送り出し、明るい未来を想像させてくれるさくらの木は、あの頃から少しだけ太くなっていました。友人が壮大な抱負を述べる中で「明るく元気な看護婦になりたい」と言って、友人に大笑いされた日のことを思い出しました。

あれから 20 年、さまざまな壁にぶつかりながら 20 代・30 代を過し、そして 40 代を迎えました。人生も折り返し地点となり、いろいろと背負う荷物も多くなり、あの頃とは外見も周囲の環境も大きく変わりました。振り返ってみれば、キャリア上で悩んだ時には、いつも「これがわたしの本当にしたいことだったのか・・間違っていないのか・・」と何かに問いながら進んできたように思います。もしかしたら、あの頃の輝く瞳の自分に聞いていたのかもしれません。今までも、そしてこれからも変わらないであろう母校のさくらを見ながら、これまでの 20 年を思い浮かべて、受け継がれていく東京医大の歴史と伝統を感じました。これからも時々、あのさくらの花びらに背中を押されながら歩んでいきたいと思います。

第 27 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 4 年)

東京医科大学看護専門学校での学び

北里大学看護専門学校　専任教員
第 28 回生(平成 3 年入学)　金子(松村) 雅子

50 周年を迎えた東京医科大学看護専門学校は、私にとって看護師としての旅立ちの場であり、今の私に看護とは何かを問い続けてくれている場でもあります。

私が入学した当時は、新カリキュラム（平成 2 年改正）の 2 年目の年であり、その後の看護師生活の中でも「新カリの学生」とよく言われたのを覚えています。実習時間が大幅に減ったと言われましたが、それでも実習はとても大変で苦しい思い出が残っています。「人の役に立ちたい」という漠然的な思いは強く持っていましたが、実際に実習場に行っても、どのように関わりを持てば良いのか、距離がわからず近づきたくても近づけず、援助を通して患者さんと一緒にいる時間を持つことで精一杯でした。看護師として働いてからは、業務中心で患者さんの気持ちから考えることがあまり出来ていなかったと思います。しかし、プリセプターや臨床指導者などの役割を通して、新人や学生たちが発見していく「看護とは何か」という過程が、私自身の看護の不足している振り返りとなっていることに気づき、教育に関心を向けるきっかけになったのだと思います。

縁あって、現在は埼玉県にある看護専門学校の専任講師として基礎看護学を担当しています。20 年前に看護学校で培った看護がベースに有り、患者さんの良き理解者で有りたいという思いを看護の素晴らしさとして、これからも学生に伝えていきたいと思っています。

最後になりますが、これからの東京医科大学看護専門学校と卒業生、在校生の皆様の益々のご発展を祈願いたします。

第 28 回生　高橋卓也先生像前にて(平成 5 年)

29 回生からのメッセージ

東京医科大学病院 乳腺科外来主任 乳がん看護認定看護師
第 29 回生(平成 4 年入学) 三原 由希子

同窓生の皆様、如何お過ごしでしょうか？皆様、それぞれの大切な職場・ご家庭で御活躍のことと存じます。私は、母校卒業以来、東京医科大学病院で病棟勤務を 17 年、外来勤務 2 年目に入り勤続 19 年目となりました。卒業後長い歳月が過ぎましたが、母校の学生指導や授業にも関わり、自分の学生時代を思い返す機会も多くあります。現在の自分の立場に時間の流れの早さを実感させられておりますが、今年は母校も 50 周年を迎えることとなりこのような文章を書かせていただいていることにも感慨深く感じております。

私は、一昨年乳がん看護認定看護師の資格を取得し、昨年より乳腺科外来で主任看護師として勤務しております。現在乳がん患者さんの治療の中心は外来となるため、治療に伴うケアだけでなく患者さんの生活で困っていること、人生のさまざまな場面での不安や心配に耳を傾け、治療の継続と生活の質の向上を目指した心理的サポート・セルフケアサポートを求められ仕事をしています。患者さんのニードを把握し、看護相談、医師・病棟との連携による支援により、患者さんの生活や人生を一緒に考えていくため責任も大きいですが、やりがいもあります。患者さん・ご家族がその人らしい生活や人生を過ごせるように、医療者特有のこだわりを持たず、柔らかい心と発想をもてるよう心がけています。私が現在の立場で看護ケアを実践できているのは、キャリアアップに対する上司のすすめや後押しとサポート、病院組織のサポート、同僚スタッフ・医師の受入と協力があるからです。また、これらが精神的にも仕事を続けていく支えとなっております。このような幸せな立場においていただいているのは、母校の温かさだと実感しております。

母校の 50 周年、本当におめでとうございます。敬愛する先生方、卒業生の皆様のご活躍をこれからもお祈りいたします。

第 29 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 6 年)

同窓生の皆さまこんにちは!!

東京医科大学病院 18 階西病棟指導係
慢性心不全看護認定看護師
第 30 回生(平成 5 年入学) 西澤(長村) 生野

同窓生の皆さまこんにちは!!

30 回生の西澤生野です。

看護学校時代はなぜか靭帯損傷や骨折などケガが多くエレベーターを使うことが多かったため、ケガをしていない時にエレベーターで先生に会っても怒られることがありませんでした(笑) 実習では腰に掛けて使用する入浴介助エプロンを首からかけて、実習服がびしょぬれに・・・。看護学校での思い出は楽しいものばかりです。

そんな楽しい看護専門学校を卒業後、救命センターに入職。8 年勤務したのち東京医大病院で一番高い病棟 18 西(循環器内科病棟)へ異動しました。窓の外に目をやると今夏完成予定の新教育研究棟築現場を見る事が出来ます。2016 年新病院完成に向けて建設ラッシュです。

私は、救命センター勤務の時から循環器看護に興味がありましたが、循環器内科病棟で心不全急性増悪を繰り返す度に QOL が低下していく心不全患者の看護実践を通して、心不全看護に興味を持つようになり、昨年、慢性心不全看護認定看護師となりました。循環器疾患の終末像である心不全は、内服・飲水・減塩・運動などを自己管理することで急性増悪を予防し、QOL を維持出来ます。心不全を受け入れ自己の生活を見直し、再調整をしていくには、入院早期より病状、患者背景を踏まえた患者指導が必要となります。そして、退院後も外来にて患者面談を行い継続看護を実践していく事で、患者様が心不全と向き合うことができるように支えることが出来ればと考え、継続看護のシステムを整備している所です。

認定看護師となってから忙しい日々を送っておりますが、周囲に支えてもらい小学 6 年生の娘の育児にも奮闘中です。育児を通して教える事、伝える事の難しさを実感しています。育児での経験は病棟で新人教育にも通じる事が多々あり、日々学びの多い毎日です。新病院建築、引っ越しと数年は病院全体が忙しくなりますが、自分が出来る事は何かを常に考えながら看護を楽しんでいきたいと思います。

第 30 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 7 年)

学生時代の思い出

東京医科大学看護専門学校 専任教員
第 31 回生(平成 6 年入学) 難波(長田) 奈保子

50 周年おめでとうございます。

19 年前の 4 月、高鳴る思いを抑えつつ、臨んだ入学式が看護の世界への 1 歩でした。2 クラス 96 名という大所帯。男子 1 名（昇ちゃん)、年齢や経験もさまざまな学生が混在する学年でした。個性が強く、普段はバラバラ。でも、いざ！という時の団結力も強かったと記憶しています。戴帽式の練習では､誰が一声目を言うか？｢男だから昇ちゃんお願い！｣って･･･、今思えば理不尽ですね。何度となく練習したその時間は楽しく、迎えた当日。昇ちゃんの「われは」の一声でナイチンゲール誓詞を宣言し、厳かな中に身の引き締まる思いを感じました｡その後､臨床の現場で実習が始まります｡その頃まで部活の練習に明け暮れ､｢THE 青春｣の日々が一変。厳しい実習に、辛く、悔しい日々を過ごしました。そんな日々を支えてくれたのが、先生であり、実習グループのみんなでした。学生時代のご褒美は海外研修でしょうか。みんなで、アメリカの UCLA などへ研修に行きました。病院の大きさや構造の違いに驚き、看護師の専門性の高さに衝撃と憧れを抱きました。気がつけば卒業をして 17 年目となりました。国内だけでなく、海外で活躍する人もいます。私自身、今年度から縁あって本校で教員をさせていただいています。峰村先生をはじめとする恩師と一緒に働いていることが、不思議でなりませんが。そして、看護専門学校でありながら恵まれた環境にある本校の魅力を再認識しております。

学生時代に学んだことは学問だけでなく、人のつながりの大切さです。そのつながりを大切に、私たちらしく歩んでいきたいです。31 回生最高～！！

第 31 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 8 年)

50 年誌に寄せて

東京医科大学医学部看護学科 准教授
第 32 回生(平成 7 年入学) 伊藤(稲垣) 綾子

このたび、50 年誌に寄稿できますことを大変嬉しく思っております。

私は、看護専門学校には社会人経験を経て入学いたしました。そのため、入学時から、卒業できなくてもできる限りでいいので看護の勉強の経験ができればよいと考えていました。ですが、私の予測に反して、本当に人のことを思いやることのできる多くの同級生に囲まれ、あっという間の 3 年間を無事に終えられたことを感慨深く思い出します。

卒業後は東京医科大学病院に 5 年間勤務し、今年で病院を離れてからちょうど 10 年がたちました。その 10 年後の今、私は新設の医学部看護学科に教員として着任することになり、再びまた懐かしい東京医科大学のキャンパスに戻ってまいりました。現在も専門学校には、学生時代に教えて頂いた先生方がおられ、学生のような気分で過ごせる時間を持てることもあります。この 4 月から、看護専門学校の授業の 1 科目に関わらせていただく機会があり、後輩たちが学ぶ姿を見ていると、人の子ではなく自分の子供を育てているようで、これはとても幸せなことだなと今までにない気持ちを感じます。

今後は、東京医科大学の看護専門学校で育てて頂いた一人として、学校が閉校になった後も、このキャンパスで看護職者を育てることに私のできる限りの力を尽くしていければと考えております。それが、私が看護職者となり、今ここにいる私を育て、助けて頂いた多くの方にお返ししたいという思いを遂げることにつながっているのです。

第 32 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 9 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 内視鏡センター 主任
第 33 回生(平成 8 年入学) 反町 和正

「学生時代の思い出」というテーマで原稿依頼をいただき当時のことを思い返しました。約 80 名のクラスメイトの中に男子学生が 3 名しかおらず肩身の狭い思いをすることがありましたが、逆に男子学生同士の結束が固まることもありました。また気の合う人たちが集まり看護について熱く語りあったことを覚えています。実習中の辛くも充実した日々の中で、患者様から頂いた言葉や実習指導者の「患者を守る」という誠実な姿勢、そして看護教員からの温かな眼差しといった経験が今の私を作っているのだと思います。

看護学校を卒業してから十数年が経過し、現在私は東京医科大学病院の外来部門に所属しています。食堂で昼食をとりながら学生時代を振り返っていたところ、2 児の母となった同級生に出会いました。そこで学生時代の思い出について何か覚えていることはないか相談したところ、「海外研修は貴重な体験だったよね」とヒントをもらいました。その一言で様々な場面が思い出されました。アメリカはロサンゼルスにある UCLA に海外研修に行ったこと。そこでは実際の病院施設を見学し、講義を聴くことができました。更にディズニーランドやユニバーサルスタジオに行き、はしゃいだこと。途中私が体調を崩したことなど、楽しく話をしながらの昼食となりました。同級生と話しているとあっという間に当時のことが鮮明に思い出されます。同じ学生時代を共有した人達がそれぞれの場所や立場で活躍していることは大変励みになりますし、身が引き締まる思いがします。同級生の存在は本当に大切でありがたいと実感します。

同級生のみならず後輩や諸先輩方とも繋がりを持てたことで、看護やマネジメントについても様々な学びがありました。このように人と人との繋がりを育んできた東京医科大学に感謝申し上げるとともに、今後の発展を祈念いたします。この度は本当におめでとうございました。

第 33 回生 記念会館にて(平成 10 年)

私の活力

東京医科大学病院 10階西病棟
小児救急看護認定看護師
第34回生(平成9年入学) 日比野(高木) 初美

みなさまこんにちは。34回生の日比野です。気がつけば早いもので、卒業してから10年以上が経過していました。

私は幼少時代から、自分も子どもなのに小児科の看護師になりたいと周囲に話していたそうです。その夢が実現し、就職当初から小児科で勤務させていただいています。また小児救急看護認定看護師を習得させていただいてから3年目になりました。

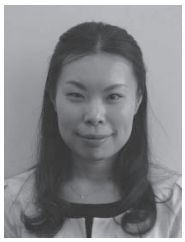
小児救急看護認定看護師は、小児の救急医療にのみ携わるものではなく、子どもの権利擁護を念頭に置き、子どもの健やかな成長のため家族を含めた援助をしていくことを目的としています。例えば、社会問題になっている子ども虐待や、事故予防、核家族化からくる育児不安への対応、家庭における初期対応能力を高める援助など、幅広い役割を担っています。これらの役割を十分に果たすことができるように、日々チームで協力しながらケアにあたっています。一人でも多くの子どもが病院でも地域でも安全で安心して暮らすことのできるような環境作りにも力を入れています。

私が仕事をしていくうえでの活力は、子どもたちのピカピカの笑顔と天使のような寝顔、親御さんたちに抱き締められている姿を見ることです。今後もこの笑顔を守っていくことができるように、未来のある子どもたちにとってより質の高い看護を心がけていきたいと思います。

第34回生 高橋卓也先生像前にて(平成11年)

母校に感謝…

第 35 回生(平成 10 年入学) 二瓶(小野) 直子



「東京医科大学看護専門学校 50 周年」おめでとうございます。

私は平成 13 年に東京医科大学看護専門学校を卒業後、今年 3 月まで東京医科大学病院で勤務していました。ここまで長かったなぁと思うこともありますが、実習服を着て同級生と緊張しながら病棟に通った日々が、昨日のことのようにも感じられます。今振り返ると、それだけ濃厚で充実した日々だったのだと思い出されます。学生時代は、まさか自分がここまで長い看護師人生を送ることになるとは、想像もしていませんでした。しかし、就職して毎日何気なく、でも一生懸命日々過ごしている内に、本当に多くのことを経験しました。辛いことや葛藤もありましたが、だからこそ感じられた達成感や、患者さんから頂いた言葉、先輩や同僚との思い出など、私にとって宝物のような時間を過ごすことができました。

現在は専業主婦をしていますが、時々臨時職員としてまた母校に戻って来る機会を頂き、懐かしい思いで学生と関わっています。私の看護師人生のスタートとなったこの母校で、今度はこれから看護師を目指す学生たちを育てるお手伝いをさせて頂けることを、大変嬉しく思い、そしてまた同じ教室で学んだ日々を思い出し、原点に戻ることができました。この秋から、また臨床で病棟看護師として勤務する予定です。

このような、人生の糧となるすばらしい仕事の礎を築いてくれた、この母校と諸先生方、一緒に学んだ同級生に感謝したいと思います。

第 35 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 12 年)

36 回生の皆様、お元気ですか？

東京医科大学病院 11 階東病棟 指導係
第 36 回生(平成 11 年入学) 國分 寿子

國分　氏家　小幡　佐藤　武石(山口)

卒業後 12 西病棟に就職し、酸いも甘いも先輩や患者様に教わりながら 7 年目にして指導係になりました。昨年異動があり現在 11 東病棟に勤務しています。学生時代は、自分が学生を教える立場になるとは思ってもみませんでしたが、今思えばとても恵まれた環境で学ばせていただいていたことに気づかされます。本院での同期は現在 10 名前後となりましたが、学生時代を共にした連帯感は何年経っても変わらず、院内ですれ違う度に仲間のありがたさを感じます。この度は 50 周年記念誌にあたって大切な仲間達からメッセージを頂くことにしました。(國分寿子)

「看学時代を振り返ると、まさに青春そのものでした。柔道部で東医体優勝を目指して練習を重ねた日々、親元を離れての寮生活で生まれた絆、仲間と励ましあいながらの試験勉強、辛かった事も今となっては楽しい思い出です。昔のように頻繁に会うことは出来ませんが、36 回生皆様のご活躍をお祈りしております。(氏家由香子)」

「この度は看護学科新設おめでとうございます。長年望まれてきた大学化実現のニュース、大変嬉しく思います。と同時に母校の名がなくなってしまう寂しさも感じています。私の卒業後は 14 西に 5 年勤務後、訪問看護ステーションに勤務、結婚・出産し只今育児に奮闘中です。次はどんな所で看護師をしようかな？と妄想しつつ、しばらくは可愛い娘のプライマリーを頑張るつもりです。(小幡貴子)」

「思い返すと看学時代は本当に勉強も実習も頑張ったと思います。乗り越えられたのは、36 回生皆と励ましあえたから。同じ志を持った友は、一生の友！出会えて良かった！ありがとう！（佐藤真弓)」

「私は現在、東京医大病院緩和ケアチームの専従看護師として勤務しています。様々な部署の方と関わる中で、同期の存在はとても心強く感じています。（山口葉月）」

メッセージは一部ですが、同期に対する思いは皆同じようで本当に嬉しいです。いつか同窓会が実現できたら素敵ですね。

第 36 回生　高橋卓也先生像前にて(平成 13 年)

50周年　お祝いのことば

東京医科大学病院 11 階西病棟 指導係
第 37 回生(平成 12 年入学)　柴田 美由紀

皆様ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。この度、東京医科大学看護専門学校 50 周年を迎えるにあたり、簡単ではありますが、お祝いのことばとさせて頂きます。

今年も期待と希望を胸に新人ナースが入職され、活気溢れる病棟の雰囲気となっています。新人さんのキラキラとした瞳を見ると、今までのさまざまなエピソードが思い出されます。看護師を目指し、必死に実習や国家試験を乗り越えた学生時代。看護師としてスタートを踏み出したものの、看護を遂行する難しさに悩んだことも、落ち込んだことも多くありました。怒涛のような新人時代から、気づけばいつの間にか先輩という立場になり、後輩指導や病棟運営に関わる役割を通して、あっという間に 10 年間が過ぎていたように思います。辛いことも沢山ありましたが、今日のこの日まで東京医大病院で看護師を続けられてきたのは、多くの人との出会いと支えがあったからだと強く感じています。悩みを親身になって聴いてくれた上司や先輩。そしてなにより同期の励ましや支えがありました。看護学生時代から同じ思いを抱えて一緒に悩んで、泣いたり笑ったり、かけがえのない時間をともに過ごしてきました。同期の存在があったからこそ頑張ろうと思うことができ、良い刺激を受けて、お互い成長するきっかけにつながっていたと思います。また、家族や看護学校の教員の方々の存在も私にとって大きなものでした。教員の方々は、気持ちが折れそうになったとき、時に家族のように叱咤激励してくださいました。入職後も、看護学校の教員室の扉をたたき、元気をもらって再び臨床に戻るといったことが何度かありました。また、心の支えという面では患者さんの存在も欠かせないものでした。看護を通して育む信頼関係や、患者さんの人生に寄り添いサポートさせていただくプロセスの中で学ぶことが多くありました。患者さんの言葉に支えられ勇気をもらい、看護が好きだと思える時間を与えてもらったように思います。

このように多くの人に支えられて今の私が在ります。看護師として、人間として、人との温かい思いやりの中に自分の存在があることを忘れずにみなさんも邁進していって欲しいと思います。そして、人との関わりをもっと好きになって、看護っていいなと思える時間を宝物にしていって下さい。未来のナースのみなさん！応援しています。

第 37 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 14 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 12 階西病棟 指導係
第 38 回生(平成 13 年入学) 芦葉 幸子

芦葉幸子　鵜野(富澤)梢江　武田(熊倉)美加　田中由佳　鈴木恵美　佐藤美加子

創立 50 周年おめでとうございます。母校が 50 周年を迎えて歴史の重みを感じています。

私は東京医大に就職し 10 年目になります。病棟では指導係として働いています。就職当初は緊張の毎日でしたが、実習で来ている先生方とお会いしたり、同期がいるだけで心強かったことを思い出します。

学生時代の思い出として、38 回生からメッセージをもらっています。

学生時代の3年間はとても充実しており、支えてくださったすべての方に感謝しております。これからのますますの発展を期待しています。　富澤　梢江

東京医大を退職してから接遇やコミュニケーションを活かし、今はクリニックで働いています。
学生時代の思い出は寮生活の 3 年間です。みんながいるから安心して生活できました。特に思い出深いのは、国家試験の追い込みをロビーに集まって寮生と共に必死に勉強したことですね。それが、国家試験当日の自信になりました。
あれから約 10 年の月日が流れますが、看護師になっても学習の毎日です。だからあまり頑張りすぎず、無理せずにやっていきましょうね。　熊倉美加

実習は大変だったけど、大切な仲間と出会って楽しい思い出がいっぱいの充実した3年間でした。　田中(高知尾)由佳

卒業後私は NICU に 5 年勤務していました。学生時代を振り返ってみると、先生方やクラスのメンバーには心配ばかりかけていました。私を臨床に出してくれた先生方、支えてくれた仲間達にとても感謝しています。東医で学び、素晴らしい先生方、仲間に出会うことができ、これからの看護師人生に活かし続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。東京医科大学看護専門学校での 3 年間は今でもわたしにとって支えになっています
ありがとうございます!!　鈴木恵美

以上で 38 回生からのメッセージとさせていただきます。今後のますますのご繁栄をお祈りいたします。

第 38 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 15 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 13 階西病棟 看護師
第 39 回生(平成 14 年入学) 深作 麻衣子

39 回生のみなさん、お久しぶりです。早いもので卒業から 8 年以上が経ちました。

看護学校入学時、自宅に大量に届いた参考書をみて、この先やっていけるのかとても不安に感じた日を懐かしく思います。自分の志していた看護の道への期待の半面、想像以上のカリキュラムや実習、数多くの試験に投げ出したいことも多々ありましたが、同級生に恵まれ乗り越えられた 3 年間だったと感じています。試験前はみんなで集まり勉強をしたり、辛かった実習ではみんなで泣きながら過ごした日々も当時は辛かったですが、あの頃の日々があったからこそ、今の自分があると感じています。実習最後の日、グループメンバーで寄せ書きした色紙は今でも大切に飾ってあり、時々眺めてはあの頃の気持ちを思い出し、初心に戻っています。

私は就職後、17 階西病棟で 8 年間過ごし、4 月より 13 階西病棟に異動となりました。聞きなれない言葉や初めて経験する処置などまだまだ学んでいくことが多く、悪戦苦闘の日々を送っていますが、学生時代の気持ちを思い出しながら、これからも努力し頑張っていきたいと思います。

第 39 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 16 年)

私の原点

東京医科大学病院 16 西病棟 看護師
第 40 回生(平成 15 年入学) 杉森(矢部) 文香

看護専門学校を卒業し 7 年が経ちました。学生時代は、看護という自分の好きな分野に没頭でき、あっという間の 3 年間でした。その中で、人の生と死に関わることを学ぶことは時に辛くもありましたが、先生方の温かいサポートのもと、同じ夢をもった仲間たちと共に乗り越えることができました。特に国家試験の前日に、全員の先生方が教壇に立ちエールを送ってくださったこと、謝恩会で仮装をして「夢をあきらめないで」を歌ってくださったことは今でも大切な思い出です。また、部活動では児童研究会(ジケン)に所属し、地域の子どもたちとの遠足や、ヘモフィリアキャンプの開催、千葉県の和田町での夏合宿など、若いパワーがなければ乗り越えられないたくさんのことを体験できました。

このような学生時代の経験は今の私の土台となっています。今でも、そこで出会った先生や先輩方、友人達と会えると心が和み、仕事への活力にもなっています。

現在、看護師として 8 年目を迎え、もう一歩、新しい目標に向かって頑張りたいと思っています。

東京医科大学看護専門学校が 50 周年という大きな節目を迎えられたことをとても嬉しく思います。今後も東京医科大学のさらなる発展を心から祈っております。

第 40 回生高橋卓也先生像前にて(平成 17 年)

いま、思うこと

鎌倉市役所　市民健康課
第 41 回生(平成 16 年入学) 若林(吉田) 歩美

卒業してから約 7 年が経ち、実習のときに憧れた先輩看護師と同じくらいの年になりました。時が過ぎるのをとても早く感じます。

私は卒業後、国立がん研究センターで務めた後、保健師免許を取得し現在は鎌倉市で保健師として働いています。保健師になったきっかけは、看護師時代に、全国から治療のために訪れ、つらい身体症状や不安を抱えながら地域に帰っていく患者さんの姿を見て、「自分の住む地域で安心して生活するために出来ることは何だろう」と考えたことです。看護師と保健師の業務や考え方の違いに戸惑うこともありますが、保健師としての支援の仕方を模索し日々奮闘しています。しかし、それでも壁にぶち当たる時、思い出すのは、看護の原点は一緒だということです。まずは「個と向き合う」こと。それができなければ、集団、地域と向き合うことはできません。学生時代に、頭を悩ませながら担当の患者さんを思い計画を立て、今できることを考えた経験が、今でも私の大事な糧となっていることを改めて感じます。

記事掲載のお話をいただき、看護学校のときの写真を眺めてみました。どれを見ても楽しそうで、同じ目標を目指した仲間がいることを改めて嬉しく思います。皆それぞれ経験を重ね、環境の変化に伴い考え方や感じ方が変わったこともあるかと思いますが、ともに学んだことを忘れず、今置かれている環境の中で活躍し、輝いていけたらと思います。

第 41 回生　高橋卓也先生像前にて(平成 18 年)

苦楽を共にした仲間

東京医科大学病院 救命救急センター 看護師
第 42 回生(平成 17 年入学) 中山 まゆみ

私は、小さい頃から看護師になりたかったわけでもなく憧れていたわけでもありませんでした。なぜ、看護師となり毎日辛すぎて、看護師になった事を後悔し辞めたくなったことも多々ある中で今まで続けることが出来たのか。

それは、患者さんや先生方、先輩や後輩から多くのことを学ばせて頂きサポートがあったから。そして何より一番は、辛い実習や国家試験の勉強を共に乗り越え支え合う仲間がいたから、いつも苦楽を共に過ごし支えてくれる同期がいたからだと感じています。

42回生は今、看護師を続けている人、看護師ではない職業になった人、母になった人、海外に行き自分の夢を追いかけている人、皆それぞれ違う道を歩んでいますが、私も皆に負けないように、皆に会った時に恥ずかしくないような自分でいれるようにこれからも頑張りたいと思います。

第 42 回生 高橋卓也先生像前にて(平成 19 年)

充実し支えられた学校生活

東京医科大学病院 10 東病棟 看護師
第 43 回生(平成 18 年入学) 多田 桂子

創立５０周年大変おめでとうございます。

長い歴史のある東京医科大学看護専門学校で学ばせて頂いたことをとても誇りに思います。学生時代で一番思い出深いことは病院や校内での実習、また学生寮での思い出が心に残っています。校内実習では病院実習直前に、グループの仲間と時間いっぱいまで毎日放課後に実技実習に取り組んだり、病院実習でも不安や緊張の中、毎日グループの仲間と声を掛け合って長い実習期間を乗り越えることができました。楽しいことばかりではなく辛いこともたくさんありましたが、一緒に支えあえる仲間の存在はとても大きかったです。

また、私は地方からの出身だったので１年間寮に入らせて頂きましたが、東京に出てきたばかりで勉強以上に新しい生活に慣れることが大変で辛いこともありましたが、一緒に勉強をしたり登下校を共にする中で不安も日に日に薄くなっていきました。看護学校で過ごした 3 年間は、私の中では今までで一番充実した中身の濃い３年間であり、本当にたくさんの方々と関わらせて頂き、支えられてきたことを実感しています。

そして、今こうして看護師として働かせて頂いていることをとてもありがたく感じています。今私は本院で勤務していますが、院内で一緒に働いている同期の仲間、また他の場所でもみんなそれぞれ頑張っていることと思います。これからも、看護学校で過ごした日々を思い出しながら看護師としても人としても成長していきたいです。

第 43 回生 戴帽式 記念会館にて(平成 19 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 13 西病棟 看護師
第 43 回生(平成 18 年入学) 鹿志村 文音

同窓生の皆様こんにちは。

私が学生時代の思い出で一番印象に残っているのは、2年生の時の成人看護学実習のことです。私はその実習の中で下咽頭癌で手術をされる患者様を担当しました。その実習の中で受け持たせていただいた患者様は手術により永久気管孔を増設されたため、失声しました。実習の初日にお話しさせていただいたときに失声をするということを最初は受け入れることが出来ずに、抱えていた気持ちを表出してくれました。そして手術室に送り出したときに、私は患者様の不安を少しでも取り除けることが出来たか不安に思っていました。その時に患者様が笑顔でいってきますと言ってくれました。手術後の患者様は筆談というコミュニケーションになかなか適応出来ず、ストレスもたまっていましたが、徐々に適応していきました。手術後、電気喉頭というコミュニケーション方法を獲得するためにリハビリが始まり、電気喉頭による声を聞かせていただくことができました。それまで声がだせるということを当たり前のように考えていた私は患者様が手術により声がだせなくなるということを受容し、適応していく過程を学び、その看護に感銘を受け、耳鼻咽喉科を希望し、働かせていただくことになりました。

就職してから早3年が過ぎ、日々の業務に追われながらも先輩方に支えていただきながら日々充実した日々を過ごしています。様々な患者様と関わらせていただく中で学生の頃の気持ちを忘れてしまいそうになるときも何度もありました。そのようなときに、学生時代の思い出を思い出し、なんとか頑張ることができました。

これからも看護師を続けていく中で辛いことも数多くあると思いますが、あのころ感じた気持ちを忘れずに日々努力していきたいと思います。

卒業式の後 記念会館にて

学生時代の思い出

慶応義塾大学病院 看護師
第 44 回生(平成 19 年入学) 菅野(田邉) 恵梨

創立 50 周年おめでとうございます。

私は卒業後から今まで慶應義塾大学病院消化器内科・血液内科病棟に勤務しています。実習でがん化学療法を受ける患者を担当させて頂いた経験から、がん化学療法看護への興味が高まり、認定看護師の資格取得を目標として日々励んでいます。

学生時代の思い出は、実習で受け持った患者との関わりです。子宮癌術後の化学療法を受ける 50 代の患者を受け持ちました。私はコミュニケーションを取るためベッドサイドに行くものの、会話が続かず、いつの間にか実習に来ること自体を億劫に感じることや、私自身に看護師の適正がないのではないかと自問自答することもありました。そんな時に指導者より「患者の苦痛を取り除きたい、回復してもらいたいという強い思いが伝わった時、患者との距離が縮まるのだと思うよ」とアドバイスを頂きました。そのアドバイスを元に実習に臨み、ケアや退院指導など患者と積極的にコミュニケーションを取り続けることで、患者と看護師という枠を超え、人と人との信頼関係による繋がりを築きあげることが出来ました。

就職してしばらくは、日々決められた業務を時間通りに進めていくために一生懸命になり、ケアに十分な時間を費やすことが出来ていませんでした。私が働いている病棟では、がん終末期の患者が多く、腹水、浮腫、倦怠感など薬剤使用だけでは十分に対処することが出来ない場面に遭遇することが多くあります。ルーチンワークの間のわずかな時間を利用し、洗髪や足浴を患者に積極的に取り入れることで、患者とのコミュニケーションを円滑にし、患者に笑顔が見られ、症状緩和につながる等、看護の力を実感しています。

経験年数を重ねていく中で、知識や技術を高めていくことも大切ですが、実習で学んだ患者の思いに気付く感性や謙虚な気持ちを忘れないように、看護師としてこれからも日々努力していきたいと思います。

第 44 回生 戴帽式 記念会館にて(平成 22 年)

看護師として3年が経過して

東京医科大学病院 16階東病棟 看護師
第45回生(平成20年入学) 藤森 恵

看護学校を卒業してから3年が経つと同時に、看護師として3年が経ちました。今回の50周年記念誌への原稿執筆の依頼を受けさせて頂き、改めて看護学校時代や現在に至るまでのことを振り返るきっかけとなりました。

看護学校3年間は、学内外での実習や国家試験の勉強などで、あっという間に過ぎた3年間でした。中でも3年次の病院実習は期間も長く、実習メンバーで励まし合い、支え合いながら乗り越えたことを覚えています。

看護学校を卒業してから3年が経ち、現在16東病棟に勤務しています。看護師1年目は、病棟の業務や看護ケアをこなすことで精一杯でしたが、患者さまから学んだことや病棟の先輩方からの指導、同期同士での励まし合いにより、ここまで続けてこれたのだと思います。今年はプリセプターとして1年生に関わっています。1年生が病棟業務に慣れるよう関わっていますが、逆に1年生から学ぶこともあり、自分の成長にも繋がっています。

看護学校時代から現在まで、様々な方々と出会い、その中から多くのことを学ばせて頂きました。つい日々の業務でそのことを忘れてしまいがちですが、出会いを大切にし、その出会いに感謝をして、これからも看護師として人間として成長していきたいと思います。

第45回生 卒業式 記念会館にて(平成23年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 18 階西病棟 看護師
第 46 回生(平成 21 年入学) 山口 咲絵

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年おめでとうございます。

私は46回生として在籍し、東京医科大学病院に就職して早くも1年が経過しました。念願だった循環器病棟に配属され、自分の未熟な看護について悩む日々ですが、学生時代の楽しかった経験や辛かった経験、患者さんとの沢山の思い出によって今の自分が支えられているような気がします。

東京医科大学看護専門学校での3年間は、新たな発見や出会いに満ちた忘れられない3年間でした。1年次の解剖生理の授業では、学生のためにと献体をしてくださったご遺体に触れる機会があり、崇高な御意志を想い涙が止まらなかったことがありました。本校だからこそ経験できた授業は、これから看護師になる私に命の重みと医療者に対する多くの期待があることを教えてくれました。3年次の実習ではグループの仲間の看護や患者さんに対する思いに刺激を受け、自分にはなかった看護観に気付くことができました。実習最終日のカンファレンスではお互いの学びを発表するうちに、自分たちで考えていた以上に多くの学びがあった事に気付かされました。自分の学びに加え友人達の学びも、看護師として働く私の糧になっています。私は社会人経験を経て本校に入学しました。年の離れた同級生に対し接しにくいこともあったと思うのですが、フレンドリーな46回生の仲間の支えがあったからこそ、試験勉強や実習を乗り越えることができたと思っています。そして、そんな 46 回生を支えてくださった教員の先生方には、看護師として、教師として、人生の先輩として沢山の学びと自信を与えて頂きました。

残念ながら看護専門学校は閉校となってしまいます。母校がなくなり慣れ親しんだ校舎や先生方のいた居心地の良い職員室がなくなってしまうのは少々寂しいですが、今後は看護大学としてのさらなるご発展をお祈りいたしております。

第 46 回生 戴帽式 記念会館にて(平成 22 年)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 集中治療部 看護師
第 47 回生(平成 22 年入学) 淺野 良子

創立50周年おめでとうございます。4月から看護師として働き始め、看護師になれたことの喜びを噛みしめると同時に、一人の看護師としての「責任」を日々感じています。

私は、社会人を経験してからの看護学校入学であったため不安もあり、入学当初は、思い切って飛び込んだ看護の世界に右も左も分からない状態でした。学校生活が始まり、あらゆる分野の学習を進めていくと、新たなことを学ぶことの厳しさと楽しさ、同じ目標を志す仲間と共に学ぶことの素晴らしさに気持ちが高ぶったことを今でも覚えています。年齢、性別、社会経験も異なる仲間と共に学ぶことで、1人ひとりの価値観を尊重するという看護師にとって必要な要素も学ぶことができたように感じます。臨地実習では、看護の技術だけでなく、看護の奥深さや人の温かさ、また、人として自分がどうあるべきかを患者様との関わりを通して学ばせていただきました。3年間という道のりの中には、看護の難しさを感じ、悩んだこともありました。実習では、「患者様にとってより良い看護とは何か」について悩むことが多くありましたが、そんな時、心から支えてくれたのは、看護について一緒に真剣に考えてくださった先生方や仲間でした。共に喜び、悩み、支え合い、同じ道を歩んできた仲間はかけがえのない存在であり、就職した今もクラスメートとお互い励まし合い、共に成長しています。

看護師になり、日々勉強の大切さを感じ、改めて患者様に多くを教わっていることを実感しています。また、卒業した今、学校で学んだことの大切さも実感しています。今は、覚えなければならない業務の多さ、自分の未熟さを痛感する毎日ですが、学校生活で養った看護観を基に、自己の課題・目標を明確にしながら知識・技術・豊かな人間性を養っていきたいです。

第 47 回生卒業式 記念会館にて(平成 25 年)

東京医科大学看護専門学校が 50 周年を迎えるにあたって

東京医科大学看護専門学校第 3 学年
第 48 回生(平成 23 年入学) 植田 莉帆

わたしは、この専門学校に入学して今まで勉強してきたこととは違った多くの専門的知識や技術を身につけたり、今まで感じたことのない経験をさせてもらったり、人として学ぶこともたくさんありました。1 年生では、座学を中心に解剖生理学や薬理、基礎看護技術などの基礎的な知識や技術を、2 年生では、小児や精神、在宅などの専門分野における看護を学んできました。とにかく覚えることが多く、試験前はわたしを含めみんな寝る時間を削って必死に頭にたたきこんで試験に臨んだことを覚えています。

わたしは入学当初、本校の「自主自学」という基本理念は、自らが主体となって学習をするという意味だと思っていました。しかし、勉強や実習を進めていく中で「自主自学」というのは、自分自身で問題点を見つけ、解決できる能力を身につけていくということであり、これから国家試験を受け、その後看護師としてやっていくわたしたちにとってとても大切なことであると気づかされました。

わたしたちは、実習をしていく中でたくさんの患者さんに出会い、その度に“看護とは何か”、“今わたしたちにできることは何か”を考え、実践してきました。実習を終えて思うことは、看護は

第 48 回生 保健体育 代々木オリンピック村にて(平成 23 年)

その患者さんによって様々で、毎回同じやり方では通用しないということ、そのため多くの知識や技術、柔軟な発想が必要だということです。わたしは、3 回しか実習に行っていませんが、実際に患者さんと関わり、触れ合うことで、言葉では表すことのできないくらい大切なことも学ばせていただきました。また、患者さんの立場に立って考えられる、患者さんにとって身近な存在でいられる、そんな思いやりのある看護師になりたいと強く思うようになりました。今後も困っている人がいたら自然と手を差し伸べられる看護の心を忘れずに実習に望みたいと思っています。

平成 25 年 4 月に、看護専門学校は最後の生徒となる 50 回生を新たに迎えました。59 名という少ない新入生でしたが、一緒に看護を学ぶ仲間が新たに加わりとても嬉しく思っています。

この看護専門学校で毎年行われている戴帽式やクリスマスセレモニーは、1 回生から行われている伝統ある行事で、わたしたちにとってもすごく感動的で思い出に残る行事となりました。看護学校がなくなった後もぜひ、看護学科でも引き継いでいってほしいと思っています。

最後に、48 回生の紹介をさせていただきます。48 回生は、とても明るく元気な学年で、いつも教室が賑わっています。授業中は先生の質問に対してとても反応がよく、好評です。実習中は、悩んでいる人がいたら声をかけ一緒に悩み考えてくれる、そんな優しい心ももっている仲間に囲まれ、わたしはとても居心地が良いと感じています。遊ぶときは遊ぶ、勉強するときは勉強する、そんな切り替えの上手な人たちが集まっているクラスだと思います。これから始まる実習は、今までにない長い期間の実習なのでとても不安ですが、同じ目標をもった仲間と助け合い、時には切磋琢磨し、乗り越えていきたいと思います。

第 49 回生による人文字“愛”(平成 24 年)

1年生を振り返って

東京医科大学看護専門学校第2学年
第49回生(平成24年入学)　米田 春奈

東京医科大学看護専門学校開校50周年おめでとうございます。心よりお祝い申しあげます。この記念すべき年に49回生を代表し、ここに執筆できることをとても嬉しく思います。

先日新しく50回生が入学し、私がこの学校に入学した日からもう1年が経ったのかと懐かしく思います。昨年度の1年間で私はいくつも初めての経験をすることができ、また、更に自分のコミュニティーも広がり沢山の人と出会い知り合い、一緒に時間を共にする事ができました。数ある思い出の中でとても印象に残っている出来事をふまえながら、私が感じた事を話させて頂きたいと思います。

私は「すけっと部」というボランティアサークルに所属しており、去年の12月に障がい児の子ども達とお母さん方と一緒にクリスマス会をする機会がありました。本番までに部員と本の読み聞かせやハンドベルなどの練習をしたり、構想を練ったりと準備をしていきました。その中に紙で作ったツリーに折り紙で作った飾りを貼ろう！という企画がありました。皆で飾り付けをする中、あちこち貼っている子ども達とは別にひとり同じ範囲にずっと貼っている男の子が居ることに気付き、「あんまり楽しくないのかな？」と思い私は少し不安に思っていました。そしてツリーは完成し壁に貼った時、横に居た友人が同じ所に重ねて貼られているのを見て「なんだかプレゼントから飾りが飛び出しているみたいで素敵だね。」と言いました。その時になって初めて「あの子はあの子なりに考えて貼ってくれていたのかもしれない。」と気付き、とても嬉しかったのと同時に、そういう見方が出来る友人にとても感動しました。

このように物事を多方面からみるということは人との付き合い方、さらに看護師に

第49回生 戴帽式 記念会館にて(平成25年)

なる身としてとても重要な事と私は思いました。患者さんの思いを傾聴し、様々な視点から気付きを得、そして共に目標に向かって試練や問題を解決していけるような心強い看護師へと近づけるよう、私はこの学校でしっかり学びたいと思います。

看護師をめざしたきっかけとこれからへの思い

東京医科大学看護専門学校第 1 学年
第 50 回生(平成 25 年入学)　千野 瞳

私が看護師になりたいと思ったきっかけは、小さい頃祖母を亡くして泣いていた私を近くにいた看護師さんが慰めてくれたことがきっかけです。その看護師さんは、私を慰めてくれた後、すぐ別の患者さんのケアをしていました。その姿に憧れ、看護の道を考え始めました。

高校生の時には、一日看護体験をして、看護という職業の大変さや患者を一番に思うことの大切さを感じ、患者さんから「ありがとう」と言われた時に看護の道に進むことを決意しました。

私達一人一人それぞれのきっかけや決意があって、この東京医科看護専門学校に入学しました。でも、看護師になりたい気持ちは皆一緒です。

入学式から約一週間後には専門的な勉強が始まり、どうしたらいいかわからず不安ばかりな毎日ですが、同じ気持ちを持つ仲間同士協力して、看護に必要な知識や技術、そして、看護師としての心を養えていけたらいいと思います。

そして、私達はこの東京医科看護専門学校の最後を飾る学生です。3 年後には 59 人全員が卒業して、社会に貢献できる立派な看護師として働きたいです。

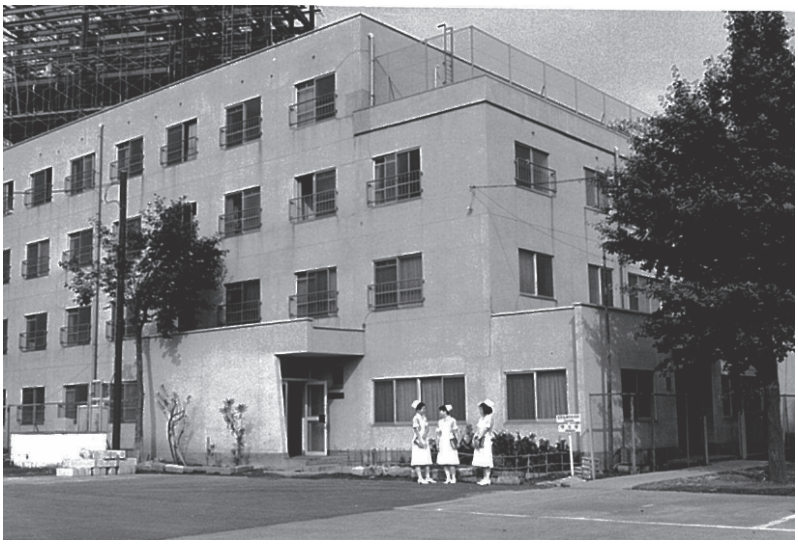
第 50 回生 入学式 記念会館にて(平成 25 年)

2. 別科同窓生からのメッセージ

東京医科大学附属高等看護学校 2 年制進学課程 別科第 1～5 回生

1970(昭和 45)年～1976(昭和 51)年

卒業生 193 名



別科寮と校舎(写っているのは別科 2 回生)

学生時代の思い出

東京医科大学病院 元看護師長
第１回生(昭和 45 年入学)　佐藤 友枝

私は昭和 45 年に別科 1 回生として入学したが、受験倍率は 11 倍と高く驚いた。当初はプレハブの校舎と古い病棟を改築した学生寮だったが、2 年生の時に 4 階建ての寮を含む新校舎に移る事が出来た。あの頃の病院周辺は畑もあり、淀橋浄水場跡地では高層ビル第一号の京王プラザホテルが建設中で、高く伸びていく様を教室の窓から眺めていた。同級生の年齢は 18 歳から 27 歳までと幅広く、職業経験も人生経験も様々の個性派ぞろいだった。1 年目は講義で 2 年目は実習だったが、兎に角、講義と試験と実習記録に追われ、人生で最も密度濃く勉強した 2 年間だった思う。又、課外授業では御殿場の青年の家の宿泊研修や鎌倉散策も有り、大学祭では食品添加物について発表し、バザーではおでんを売った。クラブ活動は英会話やテニスや合唱のクラブが有った。その他、休日には有志で高尾山や富士山にも登った。そして、学生最後の思い出は北海道への修学旅行である。一番楽しかったのは世界遺産になった知床でのカレイ釣りで、入れ食い状態で面白いように釣れた。帰りの船上でそれを船長の奥さんがさばいて海に内臓を捨てるとカモメの群がそれを狙って船を追いかけ、その雄大な景色は今もまぶたに焼き付いている。夜は船長宅でそのカレイを調理してもらい宴会だったが本当に美味だった。

短い 2 年間だったが、先生方の熱心な教育で人生の大きな礎をこの学校で築く事が出来た。卒業式と結婚式が同日だった級友もいて、卒後の東京医大病院への就職は 14 名と半数だったが、東京医大を離れても殆どが結婚や子育て後に看護の資格を生かして復職している。別科は 5 年で閉校になったが、私は東京医大病院に 40 年奉職し、昨年退職した。この間、医療や看護の環境は大きく変化し、今は看護師が大学理事や副院長になり、今年は東京医大看護学科も開校である。今後のますますの発展を祈念いたします。

第１回生入学式 同窓会館にて(昭和 45 年)

学生時代の想い出

第 2 回生(昭和 46 年入学)　須釜(旧姓高橋) なつみ

今年は、50 周年記念とともに卒業生の私たちにとって念願の大学への看護学科開設という 2 重の喜びの年になりました。本当におめでとうございます。

現役を退いた私の学生生活は 40 年以上前のことになります。凡人の私にとって、学校と寮生活はユニークな人や個性的な同級生と出会い、驚きと期待いっぱいで始まりました。そして、とても興味深く面白かった講師の先生方、体育も音楽もとっても楽しかったし、赤城山に合宿なども懐かしい思い出です。学生時代の社会のショッキングな出来事には連合赤軍あさま山荘事件、選手の活躍にワクワクした札幌オリンピックなどがあり、今でもテレビ放送される度に懐かしく思い出します。

しかし、私の学生時代で最も貴重な想い出は、臨床実習です。中でも、50 歳代の糖尿病で肺がんの患者さんは忘れられません。甘いものが大好きで毎日羊羹が食べたいという方で、すでに病気が進み胸水も溜まっていました。どうしたら体力を落とさずに食事が召しあがれるか、血糖コントロールできるか、患者さんと相談しながら食品交換表をにらめっこしたことが思い出されます。当時は「告知」はしていませんから、病気をご本人に悟られないという配慮も重要な看護でした。でもその方はわかっていて、周りに気を配っているように見えました。この経験は学生の私に根拠をしっかり学ぶことの大切さとコミュニケーション能力の重要さなど、たくさん教えてくださいました。

私達の担任は河津芳子（旧姓水野）先生です。金子純子先生とともにいつも学生を信頼し厳しくも笑顔で見守ってくださいました。看護学生は子どもではありませんし、指導は大変だったと思います。先生方は既に「成人教育」を実践されていたわけです。40 年前から比べると医療・看護は非常に発展しました。私は、EBM は重視しつつも「看護の心」の重要性をより大切に感じています。

第 2 回生入学式　※前列の実習ユニホームの学生は第 1 回生(昭和 46 年)

学生時代の想い出

第 3 回生(昭和 47 年入学)　埴生(徳見) 節子

50 周年おめでとうございます。

「412 番、あった、受かった―」。その年、3 回目の挑戦にして自分の受験番号を確認した時、私の目からは水道管が破裂したごとく涙が止めどもなく流れ、「これでやっと道が開ける」、そんな思いで東京医科大学附属高等看護学校別科の学生生活を送ることになりました。

その頃の別科と言えば、年齢も違えば、全国各地から集まり、最短資格の衛生看護高校の人、准看卒業で正看護師を目指している人。特に准看から上を目指した人は、入学金や教科書を支払った後は、自力で 2 年間クリアしなければならない為、昼間は学校、夜はアルバイトを余儀なくされ（当時はアルバイトが禁止でした）、私は医大の正面にある歯医者さんに友人と一緒に働かせてもらい、夕食付きで有り難かった思い出があります。特に教務の先生が治療に来た時は、私がアルバイト禁止と言ってあった為、「学校の先生が来たから隠れなさい」と言われ、大慌てで義工室に隠れたことを覚えています。

そんな中でも一番の思い出と言えば、寮生活や恩師との触れ合いです。寒い冬の日、寮の下を通った焼き芋屋さん。門限を過ぎていた為、声を掛けるわけにもいかず、何と窓からバケツを下して皆で分け合って食べたこと。化学や病理学が難しく、講義についていけない為、クラスメート全員でもっと分かりやすい課題を、などと抗議文を書いて先生にお願いしたこと。微生物の先生の内容がチンプンカンプンで、どうやって教科が好きになれるかと思っていたら、先生の一番好きなものはパチンコと恋人はフランス人との告白で、一気に親しみが湧いたこと。数え上げればつい昨日のことの様に駆け巡ります。

今、私は診療所に勤めていますが、普通のことが当たり前に出来ることに喜びを感じています。亡くなったクラスメート 3 人の分も一生懸命生き、少しでも誰かの為に出来ることがあれば、そんな思いも込めて書かせて頂きました。医大の看護学校は喜びも悲しみも私の青春そのものです。

第 3 回生入学式　同窓会館にて(昭和 47 年)

学生時代の思い出

第 4 回生(昭和 48 年入学)　戸村　早苗

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年おめでとうございます。

私が東医の別科に入学した昭和 48 年頃は、西新宿の高層ビルもまだ数少なく、テニスコートや緑に囲まれた中央公園によく遊びに行っていました。学校は広い駐車場の端にあり、寮が併設されていました。寮は二人部屋でしたが、みんなでおしゃべりしたり、自炊したり、もちろん試験前には一生懸命？勉強して集団生活を謳歌していました。時々門限を破り寮母さんには大変ご迷惑をおかけしたと深く反省しています。

楽しかった思い出は、赤城山にキャンプに行って皆でキャンプファイヤーを囲み、その頃流行っていた吉田拓郎の歌を歌ったこと。大学と本科・別科合同の文化祭行事で、山手線一周をしたこと。夕方東医を出発して、山手線沿いに一晩かけて歩いて一周しました。友達とワイワイ言いながら、途中で休憩したりして朝方やっとゴール。疲れたけれどやり遂げた爽快感があった様に記憶しています。其の時の記念の手ぬぐいは今も手元にあります。

授業の思い出と言えば、ドイツ語を教えて下さった小児科の小柳先生はとてもやさしくて皆のあこがれの先生で、小児科実習がとても楽しみでした。また、英語を教えて下さった先生は、テネシーワルツが大好きで、英語で歌を練習しました。教務の先生には、本当にお世話になりました。

ここでの 2 年間、大切な友人と出逢え、一生の仕事を学べた場所であったと改めて感謝しています。看学の益々のご発展をお祈り致しております。

第 4 回生入学式　同窓会館にて(昭和 48 年)

学生時代の思い出と近況報告

つちっこ保育園 看護師
第 5 回生(昭和 49 年入学)　早乙女 道子

別科看護学校を卒業して 40 年余りが経ってしまった。定年退職をしてほっとした矢先に、友人に頼まれ新設の保育園で働いています。日々成長していく園児達の笑顔と可愛さに元気をもらっています。

さて当時の学生の頃の思い出を振り返ると、共に学んだ仲間達の顔が浮かんできます。私は結婚をしていたので通学でしたが、ほとんどの学生は寮生活をしていました。当時国鉄の春闘ストライキが 1 週間続き、家に帰れず寮に泊まらせてもらいました。そこで看護研究課題を仕上げたことを思い出します。あのとき桑原さんには仲良くさせてもらい、シチューとても美味しかったです。ギターの上手だった福士さん、途中で結婚された佐々木さん、皆さんお元気でしょうか。また部活動で茶道教室があり、そこで学んだ作法は今でも役に立ち、お茶をたしなむ時、ふすまの開け方、畳の歩き方などな、ときおり思い出しています。

橋本教務主任は厳しさの中に思いやりのある先生でした。卒業の頃に結婚されて幸せそうでした。平田先生は生徒の近くでいつも相談のってくださり、頼もしく優しい先生でした。そして、あの 2 年間はプライベートなことでも波乱万丈な歳月でした。2 才下の妹が病魔に侵され看病の甲斐なく他界してしまいました。それ以来、涙が枯れてしまったようです。そして、卒業間際に妊娠し、国試の勉強も大きなお腹を抱えて頑張りました。国試合格の知らせに、すべての辛かったことも、悲しかったことも、みな浄化された想いでした。その後は地域の病院に勤務し、患者さんと共に寄り添う看護が出来るようになり看護の喜び感じるようになりなりました。

東京医科大学で学んだ 2 年間はいつまでも忘れがたい思い出で一杯です。諸先生方ありがとうございました。皆様方のご多幸お祈りいたします。

第 5 回生入学式　同窓会館にて(昭和 49 年)

3、進学科同窓生からのメッセージ

東京医科大学附属高等看護学校 3 年制夜間進学課程Ⅱ部第 1～5 回生

1974(昭和 49)年 9 月～1978(昭和 53)年 8 月

東京医科大学看護専門学校 3 年制夜間進学課程進学科第 6～10 回生

1978(昭和 53)年 9 月～1986(昭和 61)年

卒業生 281 名

学生時代の思い出に寄せて

東京医科大学看護専門学校 元専任教員
第１回生(昭和 49 年入学)　石川(宮崎) フジ子

東京医科大学看護専門学校50周年おめでとうございます。
しかし、看護専門学校は平成25年度の入学生を最後に閉校と聞き、とても残念に思います。これも時代の流れに伴い、いたしかたない事と思いつつも、一抹の淋しさを感じております。また、東京医科大学医学部看護学科が平成25年4月にスタートしたとの知らせには、幾度か看護大学への転換の経緯を知るだけに、やっと看護大学での看護教育が叶ったのだと安堵の気持もあります。
50周年記念誌の原稿依頼を受けました。私のような者で恐縮です。

私は昭和49年9月に第1回生として41名東京医科大学附属高等看護学校二部に入学し「自主自学」の精神の基で3年間学びました。
当時は本科（のち看護科）、別科、二部(のち進学科）の3課程があり、私たちはプレハブ校舎からスタート、大雨時は雨漏りでバケツを必要とする時もありました。別科閉校後は別科使用の校舎へ移動など、思い出が走馬灯の様に駆け巡っています。1・2年次は東京医科大学病院で日勤あるいは深夜勤務で仮眠の後 17:30 から 20:20 までの講義を受け、3年次は実習中心の生活でした。日勤の後「ねこまた食堂？」で夕食が取れるとラッキー、仕事もそこそこに空腹で駆けつける。席に着いた時は適当な疲労感と空腹感で授業中、睡魔に襲われることもしばしば。実習では1・2年次の学習を活かして実習を展開し記録していくものと指導を受けましたが、悪戦苦闘の日々。まさに「自主自学」の1年間、専門職の卵として鍛えられました。この成果は確実に実り、卒業後 36 年の今でも現役で、それぞれの立場で役割を果たしております。その代表が東京医科大学病院の中野看護部長さん、私たちの誇りです。

当時の教務主任の杉浦先生、クラス担任の黒坂先生をはじめ多くの方々に、ときには厳しくまた優しく私たちを見守り育てて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。

第１回生　卒業式　同窓会館にて（昭和 52 年）

学生時代の思い出・近況！

第 2 回生(昭和 50 年入学) 下城(肥後) 美紀子

母校の看護専門学校が 50 周年を迎えられたとのこと、月日の流れを感じます。

「明るい内に帰りたいよねぇ～」と話しながら、夜の新宿駅へ向かう仲間との会話！・・・。進学科の私達は、2 年間は准看護師として 3 交代勤務をしながら、夕方 5 時過ぎから敷地内にある学校へ行くという日々でした。

深夜勤務の時は学校終了後、仮眠室でしばしの仮眠をとり、仕事場へ行ったものです。ついこの間のように思っても、早いものであれから 30 年余りの月日が流れてしまいました。辛くてもあの時代を乗り越えて来た事が、自分に勇気を与えてくれました。

小さな近況ですが、二人の息子も大学を卒業し、それぞれの道へと自活しています。私も、近くのケアプラザで働かせてもらっています。人生という山を登り、そして無事に下りて行けるよう、自分もいつか行く道を学ばせてもらっています。

母校の看学も 50 回生で閉校されるとの事、残念です。全国で頑張っている仲間、元気でいつか又、会いましょう！

お世話になった杉浦先生、担任の深石先生、そして教務のすべての先生方に感謝申し上げます。有難うございました。

第 2 回生 新宿中央公園にて(昭和 52 年)

学生時代を振り返り～近況報告

第 3 回生(昭和 51 年入学) 岩田(阿部) 恵子

同窓生の皆様には御健勝で御活躍の事と存じます。又創立 50 周年おめでとうございます。進学科 3 回生を代表し寄稿出来ます事を大変嬉しく思います。

42 名で入学し、卒業時には 27 名、夜学と仕事の両立は思った以上に苦しく大変でした。疲れと睡眠不足で講義中に居眠り、何人の先生方を不快にさせた事か数えきれません。それでも国家試験に合格し今日があるのは、教務の先生、職場の協力、何より同級生との絆でした。くじけそうな時、声を掛け合い目的を達成出来た事は今も誇りに思います。大学病院での仕事は充実し何でも出来る様な錯覚もありました。結婚、子育て後に復職しましたが、10 年近いブランクを埋めるのは容易ではありませんでした。やっと楽しく調子が乗り始めた頃、大病を患い、入退院を繰り返し、患者になっていました。どん底にいた私を励ましてくれたのは、看護師、友人のやさしさでした。健康な時は解らなかった患者の気持ち、今は身にしみる程です。現在通院治療で体調も戻りました。

当たり前の生活に日々感謝し、やさしいおばちゃん看護師を目指しております。最近、義母の介護でストレスが溜まりがちです。その欝憤を好きな料理で活かそうと通信教育で「食生活指導士」を取得しました。何かの役に立てたいと思います。

最後に東京医科大学看護学校の益々の御繁栄を心より願っております。

第 3 回生 修学旅行にて(昭和 53 年)

私の学生時代

東京医科大学病院 13階西病棟 看護師
第4回生(昭和52年入学) 笠原(鴻矢) 真里子

看護学校創立50周年おめでとう御座います。

私は、福岡の衛生看護科を卒業し、昭和52年に進学科4回生として18歳で同郷の同級生3人と入学しました。進学科は、年齢層が幅広く18～50歳の方や大学卒業後に入学された方がいる特殊なクラスで日中は仕事をし、夜6時から9時まで授業を行う夜間の学校でした。授業中私が実践していた事が2点あります。一つは一番前の席で授業を受ける事。二つ目は、授業では必ず1教科に1回は質問する事です。テストで赤点を取ると追試料金1科目に付き500円を徴収されていましたが、一番支払ったのは私だった様に思います。しかし、追試で全てをクリアーしていたので夏休みの追加補修授業を受ける事がなかった事は唯一自慢できる事でしようか、、、、。居眠りしてしまっても耳だけは起きていて自分でも不思議な程、質問していました。

さらに3年生になると寮を出なければいけない規則があり、アパートを借り独り暮らしを始めました。引越しの際、荷物を運ぶ為ストレッチャーで青梅街道を同級生と3往復したのはいい思い出となっています。実習では色々と悩むことも多く40キロまで体重が落ちた事もありました。今では想像もつきませんが、、、、

4回生は、皆仲が良く、よく遊びに行きました。土曜日は大学で授業や体育があり、金曜日の夕方から歌舞伎町のディスコ（今で言うクラブ）に通い朝まで踊り、そのまま授業を受けていました。当時は3日寝なくても平気な体力がありましたね。また、時間があると、教室はディスコ会場とかし皆で踊ったりしていました。若気の至りです。

気がつけば東京医大病院に就職してから37年が過ぎ、現在3人の孫がいます。48歳でダイビング、53歳で運転免許を取るなど楽しい人生を送るためこれからも色んな事に興味を持ち挑戦し続けようと思います。今年12月には選択定年をして母の介護の為福岡に帰郷し、感謝の意を込め看護したいと思います。

第4回生入学式 同窓会館にて(昭和52年)

学生時代を想う

第 5 回生(昭和 53 年入学)　松村(榊) 茂子

開校 50 周年おめでとうございます。

同窓会の皆様、進学科 5 回生の皆様、御無沙汰しております。

随分長い月日が過ぎてしまいました。卒業して 30 年くらい過ぎ去ってしまいましたが、すぐに脳裏に浮かぶ風景は、病院内にあった校舎にまっしぐらに走って行く光景です。日勤の業務を終え受講のため教室を目指します。いつもぎりぎりの時間に仕事が終わるので、一番前の席に座り、しばらく息を整えてから授業を受けていました。

ただ夢中に前だけをみて過ごした日々、いま振り返ると感謝の気持ちで一杯です。恩師の先生方、勤務の先輩、同僚、後輩、そして同期の友達･･･。看護について、働くこと、生きていくこと、楽しむこと、たくさん学びました。

東京医科大学看護専門学校 50 年間、たくさんの夢、希望が育ち、飛び立って行ったと思います。

そしてこれから新しいかたちでの出発と聞いています。今後のご発展をお祈りいたします。

今回、振り返って想う時間を与えていただきありがとうございました。

第 5 回生卒業式 同窓会館にて(昭和 56 年)

感謝－出会った人へ－

第 6 回生(昭和 54 年入学)　　古屋(上杉) 富子

准看護師として働いていた時、アメリカの病院やナーシング・ホーム等の施設を見学する機会があり、滞在先の家族の中に、看護師として病院に勤めながら糖尿病専門看護師を目指す人がいた。彼女の話を聞き、更に病院で働く看護師の姿を見て「やっぱり看護師になりたい」と決意をして 1 年間の滞在を終えて帰国をした。

帰国後、進学コースで学ぶ事を選択、入学と就職の為に上京をした。初めての一人暮らしに、初めて大きな病院で働きながら学ぶことは容易な事ではなかった。今まで婦人科病棟の経験はない、そこには年齢の近いスタッフが居て分からない事をすぐに聞ける雰囲気でもあった。また、医師の指示が意図する事を先輩看護師に聞き指導を受けながら看護や処置の介助を行う毎日であった。だが、働く学生の日々はめまぐるしく過ぎ、時間になると、「早く上がりなさい」と残った仕事をスタッフが引き受けてくれた。そして 3 年目は実習漬け、記録が沢山あった事が強く印象に残る。実習記録を放り投げてしまいたいと思う事もあった、その反面、自分の汗と涙の結集が実習記録ファイルであり、自分の宝物の様な記録だからこそ、いつも胸元に抱え日を重ねて少しずつ厚く重くなるファイルを大事に抱えて歩く事が出来たのだと思う。

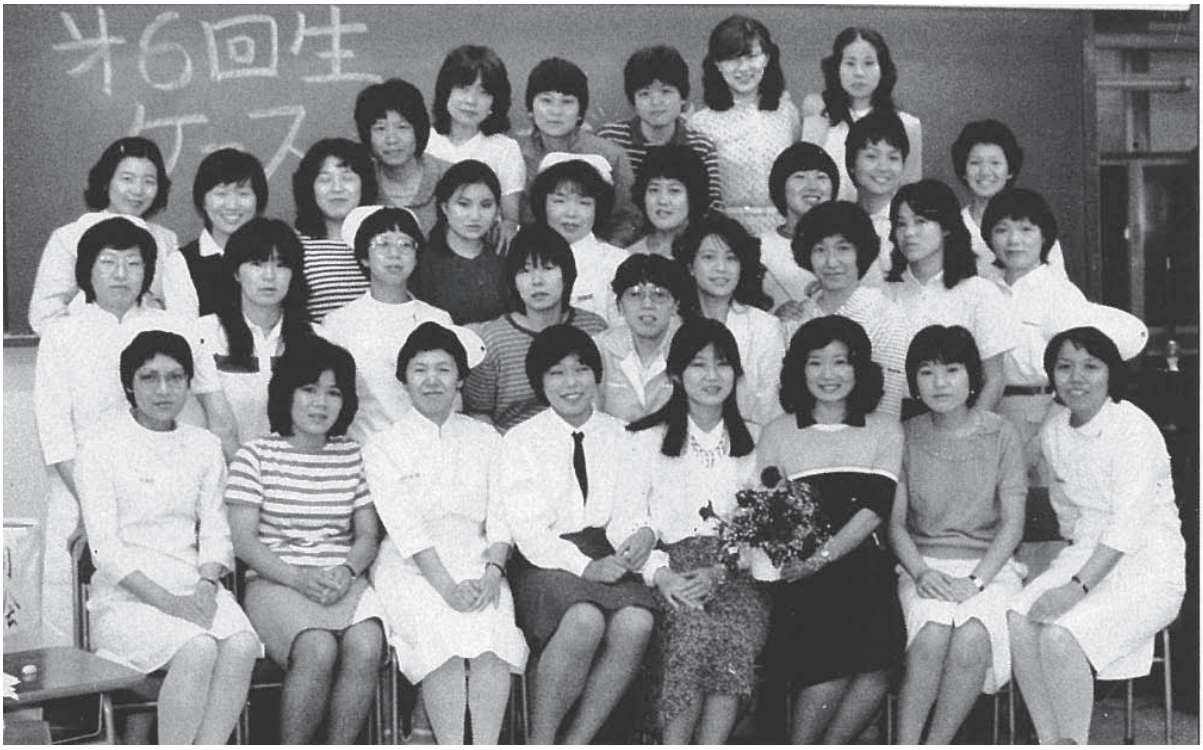
ひとまず資格取得を達成した事の安心感と安堵感に浸っている時間はなかった。新たな勤務の配属先の発表があった。私は、心臓外科病棟を希望していたが、小児外科病棟と聞いたときは、耳を疑って何度も聞き返したが、変わることはなかった。心機一転新たな配属先に挨拶に向かった時が、看護師としての始まりの一歩であった。

病棟に行けば、新たに学ぶ事が多く、仕事のスピードは速く、自分にとって先輩看護師について行く事が難しく苦しいと感じられる様になった。何もかも自信喪失となり、それに追い打ちを掛けるかの様にインシデントを起こし一層苦しくなり頑張ろうという気持ちも持てなくなっていった。

こんな私のこの状況を知っていたかの様に、かつて働いていた婦人科病棟で面識のあった（当時産婦人科教授）相馬廣明教授からネパールでの医療活動を支援して欲しいとの事だった。自分にとってネパールってどこ？ではなく常々関心を持っていた国であった為、「行きます」と即答した事を憶えている。日常のスイッチを切り替える事が出来たネパールでは、現地の妊婦や新生児の強さと生命の尊さに感嘆する事ばかり。以前に見た米国での医療水準とは比べものにならないくらいの設備でも、新たな生命が誕生していた。ネパールに何度か足を運ぶうちに、看護師のフィールドを超えた研究を発表させて頂く機会にも恵まれた。病棟で働く事以外で何かをしてみたいという思いが強くなり、退職という方法にたどり着いた。若い時に、挫折し悩み・苦しみ抜いた事が自分を成長させ、厳しい状況に居ても、看護師を辞める事なく続けてきた事が人生の糧になった様に思う。米国で出会った看護師の姿に憧れて志した看護師ではあるが、外見だけではなく、自分の看護に誇りを持ち看護師として社会の中で人々に信頼される看護師を目指したいと思うのである。

今は、重症心身障害者施設で働き始めて月日は浅いが、今までの経験を生かせる事

もある。しかし、新たな学びの方が多いのである。この事から、まだまだ学ぶ必要性と看護の深さと広さを認識させられるこの頃である。



第 6 回生　ケーススタディ終了後（昭和 57 年）

卒後 30 年はミッキーと同じ年

第 7 回生(昭和 55 年入学)　佐本(吉成) 有子

あれから 30 年は信じられない月日が通り過ぎて驚いています。ディズニーランドもこの年オープンしました。東医での学生生活は働きながら学び、沢山の経験と周りの人たちに支えられて送ることができたのだと思います。

学生時代は寮生活で 3 回の引っ越しがありました。管理人さんご夫婦には娘のように気を使って頂きました。お風呂時間を過ぎ入っていたら電気を消され、名前を貼り出されたことも今は懐かしい思い出です。

結婚や子育てで仕事の中断はありましたが、今も現役で働いております。地方の 200 床あまりの病院ですが糖尿病療養指導士として患者さんのパートナーを務めています。糖尿病のインスリン治療をしている患者さんは当院では約五百名おります。また、CSII の導入で、患者さんの QOL の改善の取り組みが始まったばかりです。課題は沢山ありますが、糖尿病療養指導士チームで毎月ミテーングをして若いスタッフから刺激をいただいています。

7 回生は、27 名で卒業しましたが、西山さんがお亡くなりになり 26 名となりました。永吉さん（現佐伯）は助産師資格をとりがんばっています。ペコ（現竹中）はグアム在住で指圧師をしています。彼女も卒業後資格をとりました。今年 2 月の日本人殺傷事件現場の裏手すぐの所に住んでいます。グアムに行ったら是非連絡してみてください。紅林さん（現寺田）はご主人の工務店を支えながら、5 人の子育てに奮闘し幸せいっぱいです。えっちゃん（現伊藤）は師長をしてバリバリというかワイワイと楽しんで働いております。

クラス会は皆さんが遠方ということもあり、参加メンバーはお馴染みさんです。時間があったら是非の参加お待ちしています。積もる話を語り合いましょう。

第 7 回生 卒業式 同窓会館にて(昭和 58 年)

近況報告

今給黎総合病院クオリティコントロールセンター 褥瘡管理課
第 8 回生(昭和 56 年入学) 下前 百合香

“50周年”おめでとうございます。卒業して早いもので 29 年が経ちました。

今でも地下教室での授業や2寮での生活は目に浮かびます。中央4階に配属され、夕方には学校に走り授業を受け、時には深夜勤務に入るなど、皆頑張っていたと思います。卒業してから5年毎にクラス会をしようと決め、最初は箱根旅行でした。その後は仕事や子育てで参加出来ない人が増え、5年以上間隔があく事もありましたが、最近では毎年秋ごろに杉浦先生や黒坂先生、そして、担任の曽山先生も参加して頂き、十数名でクラス会を開いてます。その時の話題は、やはり、東医で過ごした日々の事です。29年前の事とは思えないくらいに話がはずみ、時間があっという間に過ぎてしまいます。そして、有り難い事にそのクラス会の日程は、私の都合に合わせて決めて下さっています。

私は、現在地元の鹿児島に戻り、今給黎総合病院で専従の褥瘡管理者として勤務してます。2000年に鹿児島に帰り、外科病棟（中央4階⇒南5階⇒12階西）でしか経験がなかったので、外科病棟のある現在の病院に就職しました。あるセミナーで“ストーマ造設する病院にストーマ外来のない病院は詐欺です”と言われた事と、皮膚転移したストーマ患者のケアに難渋していた時に指導下さった皮膚・排泄ケア認定看護師に刺激され、2007年に資格取得し、昨年5年目更新を終え6年目となりました。ストーマケアで取得した資格でしたが、褥瘡や創傷ケアが中心です。週末はセミナーや学会、資料作成などに追われる毎日ですが、やりがいのある仕事だと思っています。そして、このような私の状況を考え、クラス会の日程を考えて下さる幹事さんに感謝しています。卒業以来会ってない方もいるので、できたらみんなに会いたいと思いますので、進学科8回生の皆さん連絡を待っています。

第 8 回生 新宿中央公園にて(昭和 59 年)

進学科 9 回生からのメッセージ

第 9 回生(昭和 57 年入学)　清水(小田嶋) 晴美

東京医科大学看護専門学校が今年 50 周年を迎えると聞き、心からお喜び申し上げます。また、東京医科大学医学部看護学科の設立も長年の念願がかないましたことも心からお喜び申し上げます。

卒業アルバムを開くと学生時代の思い出が懐かしくよみがえってきます。緊張した入学式、北海道の修学旅行は、アイヌの民族衣装で集合写真を撮りましたが、それより、由緒ある宿泊先は古びているせいか夜にお化けが出そうで怖かった事の方が鮮明に記憶に残っています。

進学科の昼間は大学病院に勤務して夜間に学習するため、授業時間の半分は睡眠時間になっていたかもしれません。各科目の先生方はそんな状況の私たちに駄目だしせず、根気よく教えてくださいました。感謝するばかりです。その時代で私に指導していただきました各先生方、諸先輩方にあらためてお礼と感謝を申し上げたいと思います。

看護師は患者に寄り添いながら、医療の立場と患者の立場を理解したうえで、両方に利益をもたらすようなマネジメント能力も今後は必要と考えます。

なぜなら、医療は「チーム」で動くからです。そのチームの要になるのが、看護であり看護師であると私は考えています。

最後に私から看護師として社会で活躍している人も、今看護を学んでいる方も自分自身を大切にしてください。自分自身が病んでいては患者様・自分の周りの人たちに良い看護ができません。母校の繁栄を祈りつつ、これからもお互いに社会の中で支えあいながら頑張りましょう。

第 9 回生　新宿西口の高層ビルを背景に(昭和 60 年)

進学科 10 回生からのメッセージ

東京医科歯科大学医学部附属病院 周産女性科 師長・助産師
第 10 回生(昭和 58 年入学) 野村 恭子

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年おめでとうございます。

看護専門学校各期卒業生の皆様・進学科卒業生の皆様、それぞれの専門分野でのお仕事に日々邁進されていることと思います。

思い出してみれば、昭和 58 年 9 月に東京医科大学看護専門学校・進学科に入学しました私は、現在の皆様には想像もできない当時の 9 月入学の看護学生でした。昨今の社会での各大学の入学時期を時を同じように 20 数年前に戻す傾向にあることを考えると思い出深い入学時期でした。また、その当時の看護婦国家試験は、春と秋の年 2 回でした。当校進学科の 10 回生が進学科の最後でもあり、看護婦国家試験も年 2 回の最後の年でした。このように、当校の進学科も、年 2 回の看護国家試験も最後の卒業生であり、春秋の国家試験も最後の受験でした。

当時の学校は、現在の大学病院の駐車場に変わり、当時の寮「二寮」も現在の大学病院内の敷地にあり、またその周辺も小さな商店が点在していましたが、今では「西新宿駅」が出来、更には高層ビルが乱立する光景に変わってしまいました。

このように、入学・卒業を経て 27 年経ってみれば大きく様変わりするのは当然のことと思いながらも寂しく思うこともあります。それが、私個人のセンチメンタル的な考えであるかと思いつつも、進学科 10 回生は、現在も 2 年に 1 回の同期会を当時の担任を囲んでそれぞれの勤務地・居住地から皆さん参加されています。この時ばかりは、参加者の皆さんは進学科 10 回生の看護師に戻り、時間の経つのを忘れてしまう有様です。卒業生の皆様、どうかそれぞれの同期会を開催してください。情報交換の場として明日のお仕事のお役に立つと思います。

第 10 回生 新宿中央公園にて(昭和 61 年)